

2012 年度活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2012)

目次

1. 各科目についての報告	2
2. 2012年度 Placement Test実施報告	84
3. 2012年度日本語相談室実施報告	87
4. 2012年度立教大学漢字検定試験実施報告	93
5. 2012年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告	95
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告	98
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告	98
8. センター員活動報告	99
9. 2012年度FD記録	102

2012年度日本語教育センター運営体制

2012年度日本語教育センター会議開催記録

各科目についての報告

2012 年度 JO 授業記録

コース概要

JO は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がない者を対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：平山紫帆、保坂明香

授業コマ数：週 3 コマ

受講者数：前期 5 名、後期 12 名

使用教材：プリント他

目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

JO では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。JO で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

文型リスト

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます 初めまして / (私は) ~です / ~人です / 専門は~です / どうぞよろしくお願 いします / ~さんは~ですか? / はい、いいえ / ~さんは?
コンビニ	いらっしゃいませ / お弁当温めますか / 箸 (袋) ご利用ですか / はい (お 願いします) / いいえ (けっこうです) / ~円
ファストフード 1	(~と) ~をお願いします / ください / ~ですね? / お待たせしました

ファストフード 2	こちらでお召し上がりですか/～を ～つ (もう1つ) お願いします/ ～はありますか/ あのう、すみません
レストラン 1	これは N ですか/ はい、N です/いいえ、N じゃありません/ これは何ですか/ この漢字は何ですか / ～は入っていますか
レストラン 2	何名様ですか/ おたばこは? / 禁煙席ですか、喫煙席ですか/ お勘定を お願いします/別々でお願いします/いくらですか/カードでお願いします
スーパー	～はどこですか/あちらです/～はどれですか/これです/ 大きいのはありますか/これは N の N ですか
場所を聞く	～はどこですか/ ～階です/ ～の前です
時間を聞く	～から～まで /～は何時 から/まで ですか/ ～は何曜日ですか。
電車に乗る	～はどうやって行きますか/ ～までいくらですか/電車のアナウンス
趣味について話す	～が好きですか/はい、好きです/いいえ、あまり... (好きじゃありません) / ああ、そうですか
理想のタイプ	どんな人が好きですか/～みたいな人/ ～かな/ ～さんは?/ えーと、そ うですね.../どちらが好きですか/～のほうが好きです/どちらも好きです
家族の紹介	ご家族は?/ 父と母と兄がいます/～は～にいます/ ～人家族です
日常生活 1	～を V ますか/ 何を V ますか
日常生活 2	どこで/ だれと/ いつ/ 何時に
日常生活 3	昨日～を V ましたか (動詞の活用)
感想を述べる 1	～はどうですか/ ～です。でも～。 (形容詞の活用: ～いです/～くないです/～です/～じゃないです)
感想を述べる 2	～はどうでしたか/ ～かったです/～でした (形容詞の過去形の否定: ～くなかったです/～じゃなかったです)
友だちを誘う 1	一緒に～ませんか/ いいですね/～ですか。～はちょっと...
友達を誘う 2	(イベント、出来事) があります/いつですか
今やりたいこと	日本で/日曜日、何がしたいですか ～が V たいです/N がほしいです
依頼	て形 ～てください (～ないてください)
許可を求める 1	～てもいいですか
許可を求める 2	頭が痛いので、帰ってもいいですか クラスを休んでもいいですか/いいですよ/ すみません。
過去の経験を話す	た形 (食べた、読んだ、来た etc) ～たことがありますか/ いいえ、ありません/ いいえ、ありません。でも、いつか～たいです。

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Review&Activity」の時間を設け、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

<前期>

学生数は5名のみであったが、積極的かつ意欲的に学習に取り組む学生が多く、授業内活動は活発に行なわれた。アクティビティや作文の執筆にも意欲を持って臨み、最後の課題であるスピーチでは、それぞれの能力と個性が発揮された内容となった。

一方で、導入し練習を行なった文型や語彙、仮名が定着しない様子が非常に目立ち、復習の際には、語彙を覚えていないどころか、当該の表現を習ったことすら完全に忘れており、復習の活動にならないほどであった。また、カタカナがほとんど読めずにコースを終了した者もいた。

J0は文型や語彙の定着を図るための小テストがないため、定着は個々の努力と自主性に委ねられている。だが、自主的に学習する学生は少なく、そのため、前回の授業の内容でさえ定着していないこともあり、授業外で習った表現を使用しているか疑わしいというのが今学期の現状であった。今後は基本的な表現、語彙の反復練習を多く行ない、授業の練習だけで定着が図れるような活動を行なうことが肝要であると考え。同時に、欠席により習得が遅れる、定着が図れない等の様子も観察されたため、欠席は個々の責任であるものの、欠席に対する勧告も重要だと考える。

<後期>

今学期もJ0は会話好きの学生が多く、クラス内の会話練習は毎回、楽しそうに行っていた。しかし、今学期は挨拶もひらがなも学習したことのない、完全なゼロからのスタートの学生が大半を占め、前期よりもさらに進度を遅くしたにもかかわらず、学習項目の定着は十分とは言えなかった。今後は、学生の理解や興味に合わせ、授業内で提示する表現や語彙を調整していきたい。また、今学期はかなの習得が非常に遅い学生が何人もおり、学期終盤になっても、ひらがなとローマ字の併記をしないと、スムーズな練習ができないほどであった。今後は、文字学習への意欲を引き出せるようクラスでの練習方法を見直し、学生によっては文字の導入の有無についても検討したい。さらに、習得の遅れている学生には個別に対応したり、自宅学習の比重を再考したりなど、工夫していきたいと思う。

2012年度 J1 授業記録

コース概要

J1は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週5日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：小松満帆（読解・作文、コースヘッド）、藤田恵（文法1）、
穴澤孝子（聴解会話）、御子神佳奈（文法2、総合スキル）、

授業コマ数：週5コマ（文法1、聴解会話、文法2、総合スキル、読解・作文）

受講者数：前期7名、後期9名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の利き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約500語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

聴解会話：文法1で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

文法2：文法1で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

読解・作文：文法1で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って400字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

J1で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレッスン	<ul style="list-style-type: none">• Exchanging greetings• Learning some survival expressions• Learning the writing system of Japanese language• Learning basic numbers• Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence)• Learning basic words(Date, Time expressions)
1	<ul style="list-style-type: none">• Noun sentence ～は～です• Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど• Noun modification(kinking nouns) ～の• Particle “also, too” ～も

	<ul style="list-style-type: none"> • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	<ul style="list-style-type: none"> • Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	<ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	<ul style="list-style-type: none"> • Verb groups, dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating, drinking
5	<ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching,seeing,speaking
6	<ul style="list-style-type: none"> • ～は Object に V sentence

	<ul style="list-style-type: none"> • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、てから • ～と思う • ～だろう／だろうと思う • Mimetic words ③ Condition of the body
7	<ul style="list-style-type: none"> • Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both,neither) • N1 は A、N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、Noun/adjective/verb て form、V-たり V-たり Adjective/verb し • ～かもしれない
8	<ul style="list-style-type: none"> • V-ている(Continuous action,state) • Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する • が used to describe a condition, scene before one's eyes • ～中(during, while, through) • もう／まだ • ～ませんか、～ましょう • Questions word + か／も • ～んです ①
9	<ul style="list-style-type: none"> • Giving advice ～たほうがいい • Particle に(amount of frequency per time unit) • Adverbial usage of adjectives • Noun になる • Conditional ① : と • Chang of state, condition(adjective + なる) • Mimetic words ④ Pain
10	<ul style="list-style-type: none"> • に(final destination)／を(point of departure) • V-たことがある(experience)

<ul style="list-style-type: none"> • Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain • Third person's emotion/feeling/pain/desire • Conditional ②：たら • Even if ～ても
--

授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

文法2：文法1で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法1で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って400字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<前期>

文法1：前期クラスは、学生全員が協力的で、かつ積極的に授業に参加しており、授業を円滑に進めることができた。一方で、各課の新出語彙の予習が足りず、授業の初めに行う語彙クイズの結果が全体的によくなかった。J1は日本語の入門クラスであるため、日本語学習の方法がわからず、戸惑っている学生も見受けられた。そこで今後は、授業での学習だけでなく、自宅学習など、授業外の学習の様子も注意して見ていきたい。

聴解会話：授業日の内容に関しては、特に心配はなく、熱心に楽しく、和やかな雰囲気での練習をするクラスであった。しかし、聴解会話とも難易度があがるにつれ、文法や語彙を定着させている学生とそうでない学生の差が大きくなっていった。聴解では、既習項目が定着していないという理由で、内容がわからない学生が何人か見られ、語彙や文法の定着のための練習止まりで、内容把握の練習までいかないことが何度かあった。会話でも、既習事項の定着ができていないため、会話が止まってしまうことがときどき見受けられた。今後は、既習事項の復習も頭に入れながら、新しい文型の定着練習をどう効果的に行うかを考えていきたい。

文法 2：文法や語彙がしっかり定着している学生と定着していない学生間に差が見られた。定着している学生は、文章も正確で、複雑な文を作ろうというチャレンジも見られたが、一方、定着していない学生は教科書に頼りながらの作業であった。よくできる学生が協力的だったこともあり、時には学生同士で文章をチェックする作業を行ったが、主にできる学生が一方的に助けるという形の作業になってしまった。今後はお互いに助け合い、貢献し合えるピア学習の形を目指していきたい。

総合スキル：ペア活動やクラス活動を多く行った。ペア活動ではいつも同じペアにならないよう心掛けた。ロールプレイなど授業中に即席で行わなければならない活動では、学生間にレベル差が見られたものの、スピーチなど前もって準備できる活動では、大きな差は見られなく、むしろ、即席でのパフォーマンス力が低い学生の方が、きちんとスピーチを覚えるなどの準備ができていたと言える。学生によって、得意不得意や向き不向きなどもあるが、個々の学生の力を伸ばすことができるよう、また、個々の学生が力を発揮できるよう、今後も様々な活動を取り入れていこうと思う。

読解・作文：読解、作文ともに、全体的に時間のかかるクラスであったが、その分、とても丁寧に書く学習者が多く、理解度、完成度が高かった。一部の学生が、読解の問いや作文の目的などを理解するのに時間がかかったが、クラスの雰囲気がよく、また、協力意識の高い学習者が多かったことから、大きく遅れることはなかった。読解において、語彙や文型の意味を予測して読むということが不得意な学習者が多く、全ての語彙がわからないと先へ進めないという場面も多く見られたが、教師やクラスメートに積極的に質問し、問題を解決しようとする意識が高かった。読解力、作文力の高い学習者が何名かいたが、クラス全体の歩調を考え、あまり発展的な作業ができなかったもので、今後は工夫が必要である。

<後期>

文法 1：後期クラスは、自主学習が不十分であったり、出席率が悪い学習者が数名おり、その学習者は授業の進捗についてこられなかった。日本語の入門クラスである J1 では、動詞と形容詞の語形を学期の前半に扱うが、最後まで語形が定着せず、後半で扱う文法表現も理解できないまま学期を終えてしまった学習者もいた。これらの状況は全ての学習者に当てはまるものではなく、学習意欲が高い学習者もおり、入門レベルの文法がよく身につけていた学習者もいた。今後は、学期の途中で能力差が出てしまった場合の対応方法を考えていきたい。

聴解会話：聴解では、わからない言葉があっても前後やコンテキストから意味を推測するなど、聴解力に関係するポイントにも触れながら練習をした。会話では、なるべく自然な日本語の会話になるように、日常生活で使えるように、工夫をして練習を続けた。日常よく耳にする言葉などは積極的に練習に取り組み、質問もよくしていたように思う。ただ、クラス内で扱った語彙や文法がなかなか定着しない学習者が何人か見られた。自宅学習のモチベーションを上げる方法、学習項目を定着させる工夫を今後考えていきたい。

文法 2：基本的には個人作業で短文作成を行うクラスであるが、同じスピードで進む学習者同士には協同作業をさせた。ほとんど教師の力に頼ることなく、互いに間違いを指摘し合っていた。一方、作業がなかなか進まない学習者もあり、そのような学習者には教師が一人ひとり指導にあたった。課が進むにつれて遅れをとる学習者もいたが、このような学習者に対しては学習方法も指導していくことが必要かと思われる。

総合スキル：ペアやグループワークを多く行ったが、学習者間のレベルの差が大きかったため、足並みを揃えるのが大変であった。よくできる学習者が時々暇そうにしていることもあったので、今後はそのようなことがないよう活動を考える必要がある。一方、スピーチや日本人へのアンケートとその報告をする活動では、家で準備してくる時間も与えられたため、遅れをとっている学習者もしっかり準備し、うまく発表ができていた。

読解・作文：読解、作文ともに、宿題や課題の提出率に大きなばらつきが見られた。きちんと課題に取り組む、提出していた学生は能力の向上が見られたが、ほとんど提出していない学習者もあり、そういった学習者はあまり伸びなかった。中には、自力では課題を進めることの困難な学習者もあり、その場合には教師が個別に指導した。また、学習者間であまり協力する姿勢が見られず、ペアワークなどをさせても、助け合わず、結局は個人作業のように進めてしまう学習者も複数名見られた。クラスメートと協力して、お互いに力を伸ばし合うことの大切さをきちんと学習者に理解させるよう、活動での工夫が必要であると思われる。

2012 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：小松満帆、小森由里、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

受講者数：前期 3 名、後期 6 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の利き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標

にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、使えるようになること。

また、習った文型や語彙の運用能力を高め、実際の日常生活でも適宜使えるようになること。

読解・作文：文法1で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って

400字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

J1Sで扱った文法項目はJ1と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1Sは週3日のコースであり、J1で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J1Sでは、各課を3コマないし4コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3コマで1課の場合は文法の時間を2コマ、4コマで1課の場合は文法の時間を3コマに増やした。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

3.読解・作文：隔課で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って400字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<前期>

今学期は、文法項目が既習である場合が多く、なかなか学生の意欲を上げることができなかった。授業中は真面目に取り組んではいたが、自律学習に問題のあるクラスだったため、予習や復習が不十分で、授業で新出語彙を用いた練習を取り入れると、語彙の意味を確認したり定着させたりすることに時間が奪われ、導入予定の文法項目の練習が十分に行えないことが多かった。また、不正確なまま覚えている項目をなかなか直すことができず、最後まで語彙や活用の不正確さが目立った。既習項目では、導入と応用練習の時間を調整すること、そして、不正確なまま定着している項目を学生に自覚させ、修正させることで、上記の点を改善していきたい。さらに、学習者の自律学習をどのように指導していくかも、

今後の課題である。

<後期>

クラス全体としては、授業中は学習者全員が真面目に取り組んではいたが、個性の強い学習者が複数名おり、学習者間の関係を平穏に保つことに非常な配慮が必要なクラスであった。そのような状況の中で、さらには学習者が6名という小さいクラスであったため、ペアを組むのが非常に困難で、学習者同士のペアワークも単調になりがちであった。学習者間の関係がクラス全体に影響したのか、相対的に遅刻・欠席が比較的多く、宿題の提出率も低かった。また、授業中の学習者の発言量に大きく偏りがあり、積極的に発言する学習者に対しては適宜コントロールをし、消極的な学習者には発言機会を与えるといった対応が必要であったが、そのコントロールが難しいクラスであった。

学習面では、学期前半に扱う項目については既習の学習者が多かったが、正確さに対する意識の低い学習者が多く、不正確なまま定着している学習者も見られた。そのため、既習項目であっても、語形の練習などに時間を取られ、ロールプレイなど実践的な運用能力を高める活動を十分に行うことができなかった。Sクラスでは、学生にとって既習項目を扱うこともあるが、正確さへの意識を高めることが今後の課題として挙げられる。作文では、知っている語や表現を使ってみたいと思う気持ちが先行し、語と表現のバランスがとれていない文を書く学生が複数いた。学生の向上心の表れであると考えるが、このような学生に対して、学習意欲を下げることなく指導する方法を考えていきたい。

2012年度 J2 授業記録

コース概要

J2は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙500）を身につけているものを対象とする。週5日、毎日スキル別（文法Ⅰ、文法Ⅱ、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法Ⅰで習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：高村めぐみ（文法Ⅰ、総合スキル）、御子神佳奈（文法Ⅱ）、小島佳子（聴解会話）、高橋雅子（読解作文）

授業コマ数：週5コマ（文法Ⅰ、文法Ⅱ、聴解会話、読解作文、総合スキル）

履修者数：前期7名、後期6名

使用教材：独自教材

目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については1000を目標に増やす。

文法Ⅰ：さまざまな接続詞や接続助詞や文末表現，時間の表現などを理解し，それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより，アカデミック場面，日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションが出来るようになることを目指す。

文法Ⅱ：さまざまな接続詞や接続助詞や文末表現，時間の表現などを理解し，それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで，語彙の活用，接続，助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法Ⅰで習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聴いたり，話したりすることにより，アカデミック場面，日常生活場面での簡単なコミュニケーションができることを目指す。

読解作文：文法Ⅱで習った文型や語彙を使って，簡単な作文が書けるようになること，及び，簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法Ⅱで習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと，未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また，実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ，コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing, Crying, Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything, Anyone, Anytime, Anywhere, Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost, required time 値 段・時間内の「で」 6. のに: Although, Even though *Review のに, が/けど, ても

	7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	<ol style="list-style-type: none"> 1. V-方 How to V 2. Vながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on, possession, own ～がある 4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	<ol style="list-style-type: none"> 1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	<ol style="list-style-type: none"> 1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	<ol style="list-style-type: none"> 1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. Vてある 3. Intransitive Vている vs Transitive Vである 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	<ol style="list-style-type: none"> 1. Vておく 2. ～が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors, some acts) ～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど (けれども) 6. Imitative words : Caught a Cold ?
8	<ol style="list-style-type: none"> 1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose

	6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	<ol style="list-style-type: none"> 1. 伝聞 Hearsay, Conveying information getting from another person, media ～そうだ・ということだ・とのことだ 2. Vてしまう 3. Review: Vている, Vである, Vてみる, Vおく, Vてしまう 4. [Question words] か / ～かどうか 5. V1ないでV2 without doing V1, do V2 6. Imitative words : Hitting, Breaking 7. Compound Verbs ③Vなおす・Vかえす
10	<ol style="list-style-type: none"> 1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess, Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ～ことにする・～ことになる 3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance, Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ 5. V-て いく・くる do V and come/go 6. Imitative words : Animals, Birds

授業の方法

読解作文（月）、文法Ⅰ（火）、聴解会話（水）、文法Ⅱ（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行なわれた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法Ⅰ：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。

毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズⅠ」を行った。

また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シートⅠ」を宿題にした。

文法Ⅱ：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出文法を

理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。また、新出文法の理解度を確認する

ために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行っ

た。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための

の会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シートⅡ」を宿題

にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカシヨ

ンを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文

法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800字程度の作文を書く練習を行った。また、

隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロールプレイ、スピーチを行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズⅡ」を行った。

結果と課題

<前期>

文法Ⅰ：日本語を積極的に使おうとしない学生がおり、注意をしてもクラス内で英語を使用することが多かった。また、遅刻、欠席が目立つ学生もいて、クラスに少なからず影響を与えていたと思う。但し、真面目な学生についてはコース開講時よりも日本語能力がアップしていたと思われる。

文法Ⅱ：集中力のある学生とない学生がいた。短文作成のみを行う授業なので、集中力がなるとなかなかかどらず、授業時間を有効に使えない結果となってしまった。どのように集中力を保持させるのか、やる気を起こさせるのかというのが課題となった。作業ペースに差があるので、全員というわけにはいかなかったが、だいたい同じスピードで進む学生同士にはピア学習をさせることができ、学生間で互いの間違いを指摘し合っていた。

聴解会話：聴解では、基本的な聴解問題を扱ったが、日常の日本語接触が乏しい学生は授業の練習だけではなかなか伸びなかった。また、会話では、ターゲット文法だけでなく、レベル2以前の文法・文型でつまづく学生も多かった。そのため、基本的練習にとどまり、応用練習が十分行なえなかったため、個々の学生の発話量も少なくなってしまう。今後は、授業外でも意識的に日本語経験を積むよう促すとともに、授業では個々の発話量が増えるよう練習内容を工夫していくことが課題である。

読解作文：読解では、基本的に授業では辞書を使用せず、わからない表現や語彙があっても前後の文脈から推測して読んでいく練習をしていった。しかし、辞書で意味を調べないと落ち着かない学生や、内容を英語で確認しないと次に読み進めない学生もいた。

作文は、内容・構成・主張をしっかりと書けている学生がいる一方で、指定されたテーマで書けない、既定の分量を満たせない、書くことに興味がない等、日本語能力・授業に対する意欲に差が学生間に見られた。

今後の課題として、クラス内の学習スタイルや意欲の差に対応できるような教室運営を考えていきたい。

総合スキル：昨年に続き、2回のスピーチを行った。また日本人大学生がクラスに参加してくれる機会があったので、様々なトピック（各国のジェスチャー、あいさつにまつわる話など）について文型・文法を意識しながらも、かなりフリートークに近い形で話し合う機会も得られた。ただ、その時に半数の学生が休んでしまったのが残念だったが、参加した学生（日本人大学生および留学生）からは非常に好評だった。

<後期>

文法Ⅰ：遅刻、欠席も少なく、また予習や宿題などの課題をまじめにこなす学生が多く、授業もスムーズに展開できた。クラス内での日本語のレベル差があったものの、クラスメート同士は仲が良かったので、お互いに助け合いながら授業を進めることが出来た。正確に発話することに重点を置いたため、ほとんどミスがなく発話できる学生もいたが、助詞や活用ミスが多少化石化していると思われる学生もいたのが問題だと思われる。今後はこのような学生に対する効果的な指導を考えてく必要がある。

文法Ⅱ：このクラスでは文章を正確に作るということが目的の一つでもあるが、その目標に対する達成度が全体的に高かったように思う。話すことはできても正確さに欠け、助詞が弱いというような学生もいたが、クラス人数が少なかったこともあり、一人ひとり丁寧に指導を続けた結果、最終的には文章の精度も上がり、間違っている箇所を指摘すれば自分で直せるレベルにまで達した。クラス人数が多い場合にも、同じようなレベルでの指導が行えるよう考えていきたい。

聴解会話：聴解では基本的な聴解問題を扱ったが、少し複雑な内容だったり、発話スピードが少し早かったりすると、普段よくできる学生でも聞き取りに困難を感じたようだった。しかし、聴解力は、普段の文法力、語彙力に比例していたため、聴解力を上げるためにも、文法力、語彙力をつけるよう指導していく必要がある。会話では、発話に積極的な学生が多かったため全体の発話量は非常に多かったが、話したい内容に気を取られ、文法などの正確性をなかなか意識できない学生がいた。正確性を意識した発話につながるように指導を工夫していくことが、今後の課題である。

読解作文：ほとんどの学生は日本語での会話は上手であったが、書かせると助詞や活用が不正確だったり、読ませると読み間違いが多く見られたりと、本人が自覚している日本語能力と実際の日本語能力に差が見られた。そのため、読解では、内容理解を中心に進めつつ、時間があるときに、文の区切りを意識させながらの音読をできるだけ取り入れた。また、作文では、モデル作文で使われている文や表現の一部分を書き写す作業を取り入れた。学期後半には個人差はあるものの、読みやすい長い文章がある程度書けるようになったように思われる。今後は基本的な表現を学ぶ単調な活動を、学生に飽きさせないように授業に取り入れる工夫を考えていきたい。

総合スキル：前期と同様、学期中に2回のスピーチを行った。4技能が伸ばせるように、1.導入→2.ディスカッション→3.原稿・アウトラインシートの作成、チェック→4.発表練習→5.発表→6.QA→7.FBという流れの中で授業をすすめた。3.原稿作成やチェック、4.発表練習、7.FBではピアレスポンスの時間を多くとった。仲の良いクラスだったので、お互いの長所、短所を指摘しあうことが出来、効果的な活動になったのではないかと思う。また人数が少なかったため、教師の目が十分に行き届き、学生とは違った視点からの指摘。指導も出来た。

2012 年度 J2S 授業記録

コース概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日を進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：小森由里、高村めぐみ、高橋雅子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、聴解会話、読解作文）

履修者数：前期 4 名、後期 4 名

使用教材：独自教材（J2 と同じもの）

目標

接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1000 に増やすことを目指す。また、J2 で習う文法項目を理解すると同時に、実際のコミュニケーション場面を意識し、運用能力の向上をはかることも目指す。

授業の方法

テキストと語彙リストを軸として、習った文型や語彙を日常生活の場面で使う練習を行う。学生は授業前に必ず語彙や文法の予習を行ってこなければならない。

クラスでの授業は、一課の文法項目を 2 回～3 回に分けて導入した。一つの文法項目の導入終了後に①パターンプラクティスを中心とした口頭練習、②聴解教材を使用した聴解練習、③文法項目を使用し、実際の場面を設定した会話練習、④短作文をつくる練習を導入した日に行った。また毎回授業のはじめに、新出語彙の定着度をはかる「語彙クイズⅠ」、新出語彙の運用度をはかる「語彙クイズⅡ」、新出文法の理解度をはかる「文法クイズ」のいずれかを行った。さらに、課ごとに新出語彙を覚えるために「語彙シートⅠ」を、新出文法を理解するために「文法シート」を、新出語彙の活用、運用を定着するために「語彙シートⅡ」を宿題とした。

読解作文については、J2 と同様、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。

結果と課題

<前期>

新出語彙や文法の予習を十分に行ったうえで授業に臨んでおり、授業中も積極的に質問し熱心なクラ

スであった。日本語能力の高く、教室外でも意欲的に日本語を使ってみようとする姿勢のある学生ばかりだったので、新しい文法項目の導入にはあまり時間を使用せず、聴解・会話など応用練習に時間をかけることができた。問題は、遅刻、欠席が多かったことである。遅刻、欠席の理由は体調不良や寝坊が多かった。今後は、時間通りに出席することの重要性を理解させ、授業に影響が及ぶような生活態度には更なる注意が必要であろう。遅刻が教室活動にも影響を及ぼしていたのも残念である。遅刻者の入室によって一時的に授業が中断され、クラス全体の集中力が途切れてしまったり、欠席者がいることで、元々少人数のクラスがより小さくなり、ペアでの練習が単調になってしまった。また、これが原因で、課題の提出率の低さが最終成績に影響してしまった学生もいた。今後は、授業の内容だけではなく、遅刻や課題提出の大切さにも目を向けるようにしたい。

また、今学期は、コース開始後 1 か月を過ぎたころにドロップアウトした学生が 1 人出てしまった。ほかの科目が忙しいことが原因のようだが、非常に残念なことである。

読解作文については、教科書以外にも宿題として+α の課題を与えたが、積極的かつ丁寧に取り組んでいた。今後は、内容を推測しながら読む練習なども取り入れていきたいと考える。

<後期>

各学生の日本語学習の目的が明確で、学習意欲の高い学生ばかりだった。毎回、授業の予習もきちんとし、授業中も質問や発言が積極的に見られた。授業中は、文法説明やドリル練習にはあまり時間をかけずに、応用練習などに時間をかけた。宿題やクイズでは、返却した際には、何が間違っていたのかをその場で確認し、なぜ間違っているのか理解できないときには、教師にすぐに尋ねるといった積極的な姿勢もみられた。但し、文型や語彙の知識があるばかりに、シンプルな言い方で済むものを複雑に表現し、かえって何が言いたいのか分からない回答がときどき見られたので、返却を担当する先生に引き継ぎをし、フィードバックをしていただいた。このようなクラスを担当し、教員間の引き継ぎやチームワークが大切であることが実感できた。

問題は、毎回授業冒頭で行われる語彙・文法クイズや宿題に取り組む姿勢である。中間・期末試験という大きな試験に向けては準備をしていたし、上述したように、返却時には自分の間違いに気づこうとし、教師に質問もしていたが、クイズの準備や宿題に十分な時間を費やしていたかという疑問が残る。クイズや宿題の点数は決して良いとは言えないことが多く、そのため授業中は非常に熱心であるにもかかわらず、新出語彙・表現が十分に定着していなかったと言える。クイズや宿題の重要性を認識させ、もっと力を入れるよう教師から声かけするなど、コースの早い段階で対処すべきだったと悔やまれる。今後の課題としたい。

2012 年度 J3 授業記録

コース概要

J3 は日本語の基礎を習得している者（1,000 語程度の語彙及び初級前半の文法等）、日常生活の基本的活動（買い物や依頼など）が日本語のできる者を対象とした初級後半のコースである。週 5 日授業が展開され、スキル別（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）に学習を行う。

担当者名：藤田恵（文法）、平山紫帆（聴解会話、総合スキル）、穴澤孝子（読解）、御子神佳奈（作文）

授業コマ数：週 5 コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：前期 3 名、後期 4 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess, Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess, Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり

	<p>5. ～がえり</p> <p>6. Review : Time Expressions</p> <p>7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation</p>
3	<p>1. 条件 Conditional ③ ば</p> <p>2. ～ずつ</p> <p>3. V-ていく／くる Change</p> <p>4. Change of one's behavior</p> <p>5. Change of one's ability</p> <p>6. Review : Expressions for talking about some change</p> <p>7. Adverbs indicating various changes</p> <p>8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は</p>
4	<p>1. 条件 Conditional ④ なら</p> <p>2. V-ようと思う／V-ようにする</p> <p>3. V-ようにしたができなかった、V-ようにしてもできない</p> <p>4. Fraction 三十分の一、五十分の一</p> <p>5. Review : 条件 Conditional</p>
5	<p>1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses, Conjecture ④ はずだ</p> <p>2. Review : Various expression for Speaker's Guess, Conjecture</p> <p>3. ～の多く</p> <p>4. ～以外、以内、以上、以下</p> <p>5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて</p> <p>6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに</p>
6	<p>1. 受身 Passive Verbs</p> <p>2. Direct Passive Sentences 直接受身</p> <p>3. Indirect Passive Sentences 間接受身</p> <p>4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence</p> <p>5. Compound Particle ② ～によって</p> <p>6. Sentence ending particles 終助詞</p>
7	<p>1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない</p> <p>2. Imperative form Command, Prohibition 命令形、命令、禁止</p> <p>3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む</p> <p>4. Review : Expression for Cause, Reason</p> <p>5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて</p>
8	<p>1. 使役 : Causative Sentences</p>

	2. Causative Verbs VS V-てもらふ／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらふ／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらふ／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling, emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらふ／くれる／あげる 使役-てもらふ／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific, humble expressions)

授業の方法

J3は週5日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合タスクの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<前期>

文法：前期クラスは、予習をきちんとしてきており、授業を円滑に進めることができた。例年、J3では「使役受身」と「使役あげもらい」に混乱が見られるが、このクラスは比較的混乱なく進められた。「使役」の導入に時間をかけ、学生が理解していることを確認してから、その後の項目に進んだことがよかったのではないと思われる。このクラスは元々理解のはやい学生が多かった。このようなクラスでは、文法の時間から運用練習に入った方が、学生にとって有意義であったとも考えられる。今後はクラスの理解度に合わせた授業運営の方法を考えていきたい。

聴解会話：今回の学生は、普段の会話では滑らかに話せるものの、細かいところまでは聞き取れていなかったり、文法的な間違いが目立つ学生が多かった。そのため、授業ではディクテーションを適

宜取り入れ、また、正確に話すための練習を行った。その結果、細部まで注意が向くようになり、正確性も向上した。ただし、使役や使役受身、敬語は頭では理解できていても、会話で使うのは難しかったようで、ぎこちなくなったり、ゆっくりになってしまうことが多かった。そうした項目については、練習時間をもっと多く確保できるよう、授業の時間配分を見直していきたい。

読解：とても熱心な学生達で、特に大きな問題はなかった。間違いを指摘すると自分で修正できることが多かった。しかし、新聞記事など、あまり読みなれていないものは語彙が難しく、サポートがいつもより必要であった。新聞記事以外は、細部の内容把握にはあまり問題がなかったので、文章全体の構造に目を向けさせながら読解を行う授業を何回か取り入れた。構造を考えることで、内容を把握するスピードをあげることができたと思う。今後は、文章構造を考えながら自分の言葉で要約をする練習も、もう少し取り入れていきたい。

作文：文法や表記の間違いは少なく、トピックに合った内容でうまく作文が書けている学生が多かった。

しかし、作文例や作文構成が提示されていた課では、作文構成もうまくできていたものの、それらが提示されていない課では、作文構成を考えるのは難しかったようである。もう少し早い段階から作文構成を意識させるように心掛けたい。

総合スキル：今回、スピーチは3回行った。どの学生のスピーチも興味深い内容が多く、質疑応答も非常に活発になされた。しかし、構成に問題があるものや部分的に意味のわかりづらい発表、スムーズさに欠ける発表がたびたび見られた。今後はもっと準備に時間をかけ、より完成度の高い発表ができるようにしていきたい。

<後期>

文法：後期クラスは、どの学生も出席率がよく、学習意欲も高かった。初級後期レベルのJ3では、「受身」「使役」「使役受身」「使役+授受表現」の使い分けに苦労する学生が多いが、このクラスでは、積極的に質問をする学生が多かったため、どの学生が遅れをとっているのかを把握することができ、疑問点の解決がしやすかった。今後は、今学期の学生からの質問内容を振り返り、これらの表現を導入時にどのように提示すれば混乱が防げるのかを考えていきたい。

聴解会話：毎回、その課の文法項目を使用した会話練習をプリントを使用しながら行ったが、モデルを使用した練習の後にそれを応用したオリジナルの会話をできるだけ多く練習するように留意した。その結果、学生たちが自分で考え、話そうとする姿勢が強くなり、会話力が向上したように思う。今後も、実践を意識しながら会話練習を行っていきたい。

読解：宿題も忘れずに出し、遅刻や欠席も少ない学生達で、特に大きな問題はなかった。学生によって、得意なところ、苦手なところが違っていたため、クラス全体でポイントをおさえた後は、個人的に間違いの指摘をして、自分で間違いを修正させる進め方をしていった。細部の内容把握にはあまり問題がなかったため、文章全体の構造に目を向けさせながら読解を行う授業を何回か取り入れた。構造を考えることで、内容を把握するスピードをあげることができたと思う。今後は、速読や要約練習にもつなげていきたい。

作文：初めの頃は、作文の原稿用紙の使い方もわからず、作文構成もうまくできない学生がいたが、全員まじめに取り組み練習を重ねた結果、最終的には自分で構成が考えられ、うまく作文が書けるまで上達した。しかし、語彙数が少ない学生や、漢字が苦手なひらがなばかり使っていた学生は、いくらターゲットの文型が使えていても完成度が低く感じられることが多かった。語彙や漢字指導を今後の課題としたい。

総合スキル：今学期はスピーチの回数を減らし、クラスでの準備時間を多めに設定した。その結果、一人一人のスピーチの完成度が上がり、また、学生たちも自信を持って発表できるようになったようである。さらに、今学期は毎回のスピーチを録画し、クラス全体で一緒に見直しながらいフィードバックを行ったが、実際に自分のスピーチを見ることによって、よい点や改善すべき点が学生自身で考えられるようになった。こうした活動を今後も続けていきたい。

2012年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：小松満帆、穴澤孝子、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）

受講者数：前期 3 名、後期 4 名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3S は週 3 日のコースであり、J3 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースを進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、4 コマで 1 課の場合は（7 課以降）、文法の時間を 2 コマに増やした。

1. 文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを中心とした練習を行った。
2. 運用練習：文法で扱った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。
3. 読解・作文：読解では、様々な長さやジャンルの文章を読み、内容理解のほか、自分の意見を述べ合う練習を行った。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、2 課に 1 度のペースで漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<前期>

前期クラスは、学習者の理解度に差があり、授業の進度をどの学習者に合わせるのか、調整が困難なことがあった。理解の早い学習者は、学期後半に学ぶ「受身、使役、使役受身」といった項目も正確に使えるようになっていた。一方で、宿題や予復習などのクラス外学習が足りず、これらの項目が理解できないまま、学期末を迎えてしまった学生もいた。学生の理解度の差が出ることは今後も予想されるため、このような場合の授業運営の方法を考えていきたい。

また、日常会話には慣れている学習者が多かったが、言いたいことが簡単な 1 文の羅列になってしまいがちであったため、文接続やいくつかの文型のコンビネーションなどをもう少し口頭練習に取り入れてもよかったと思われる。さらに、既習文法を使って意見を言うなど、総合的な練習ができれば、さらなるステップアップにつながっていくと考えられるため、今後はより応用的な練習を工夫していく必要がある。

<後期>

授業態度が大変よく、協力的で、どの学習者も課題に真剣に取り組んでいた。また 4 名と少人数であったことから、個別に指導する時間もとりやすく、個々の能力が把握しやすかった。

文法項目の理解は比較的スムーズに進んだが、実際の会話や作文で、言いたいことを表現するのが苦

手な学生もいた。そのため、会話練習は、単なるリピートや暗記にならないように、状況を考えながら発話する練習を多くするよう意識した。皆、積極的にいろいろな状況を考え、会話練習を行っていた。今後も、新しい文法項目を導入しながら、実践力につながる練習を多く取り入れていきたい。

読解作文の授業は特に時間が限られているため、時間配分を工夫しながら行った。作文では、書き言葉と話し言葉の区別がつかない、常体と敬体が文章中に混ざってしまう、明瞭な構成が立てられないなどの問題点が見られた。作文のフィードバック時に、これらの問題がある学生に対しては個別に指導をしたが、いずれの問題もこのレベルにはよく見られる傾向であるため、クラス全体でも扱う必要があると考える。引き続き、指導方法を考えていきたい。

2012年度 J4 授業記録

コース概要

J4 は初級終了段階の学生を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の4クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名： 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 8 名、後期 6 名

使用教材：独自教材

目標

初級で学習した文法事項、文型を復習しながら、それらが正しく、流暢に使えるようになることを目指す。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型	表現
1	①～して、考えさせられた／思い知らせられた ／気づかせられた ②～が～を ～させる ③～は～だけでなく～の問題だ	「ように」を使った表現
2	①～からといって、～が必ずしも～ (negative) ②～ずに、～ ③～のか／のかどうか については ～	「ばかり」を使った表現
3	①～原因は～ことにある ②～のは～からです ③AとBでは～が異なるので～ ④AやBは～なので、たとえ～ても～することはない ⑤AやBは～なので、もし～たら～	「限り」を使った表現 1
4	①～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ②～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ③～が～に～を生じさせる ④～たり～たりするだけでは～ ⑤～は～が～であることを利用して～	「限り」を使った表現 2
5	①～ときに～と～ ②～ときに～ても～ ③私は～て～ことに気がついた	「意向形」を使った表現

	④～は～だから、もし～なら～ ⑤～ことは～だから、もし～なら～	
6	①～まま～ ②～つつ～ ③～は～なり～	尊敬語
7	①～ことにしている ②～ことになっている（習慣） ③～ことになっている（予定） ④～は～ことから～（理由） ⑤～は～ことから～（judgment） ⑥～は～こととなると～ ⑦～は～ことなく～	謙譲語
8	①～は～つつある ②～は～さえ～ ③～でさえ～ ④～さえすれば～ ⑤Noun さえ～ば、～ ⑥～とすれば、～ことになる ⑦もし～としても、～	受身
9	①～すると、Aは～だが、Bは～ ②～するときに重要なことは、～か／かどうか という ことよりは、～か／かどうか ということである ③～するときに重要なことは、～か／かどうか という ことではなく、～か／かどうか ということである ④～ものとしてしまう ⑤～ものとして～	名詞修飾 by using という
10	①～にもまして～ ②仮に／たとえ ～にしても～ ③いくら～にしても～	使役／使役受身

授業の方法

<前期>

授業は1回に1課のペースで進行した。各課は、既習文法を複数組み合わせさせた比較的長い文型を扱う Part 1 と、初級文法を機能別、形式別に取り上げる Part 2 から構成されている。Part 1 も Part 2 も、

ターゲットとなる文型・文法項目を説明後、文を完成させる練習などを通して、文型、文法項目が理解でき運用できるか確認した。各課の **Comprehension check** と学習した文型・文法を用いた短文作成を毎回宿題にした。**Comprehension check** は翌週の授業冒頭にクラス全体で答えあわせをし、短文作成の宿題は個別にチェックした。

<後期>

授業は1回に1課のペースで進行した。各課は、既習文法を複数組み合わせた比較的長い文型を扱う **Part 1** と、初級文法を機能別、形式別に取り上げる **Part 2** から構成されている。**Part 1** も **Part 2** も、ターゲットとなる文型・文法項目を説明後、文を完成させる練習などを通して、文型、文法項目が理解でき運用できるか確認した。各課の **Comprehension check** と学習した文型・文法を用いた短文作成を毎回宿題にした。**Comprehension check** は翌週の授業冒頭にクラス全体で答えあわせをし、短文作成の宿題は個別にチェックした。

結果と課題

<前期>

学生どうしの仲がよく、協力して文型・文法を学習しようとする大変好ましい学習状況がみられた。英語圏の学生が大半だったため、コース初めは、授業の前後で学生どうしが話す時は英語であったが、コースが進むにつれ、英語圏ではない学生に配慮し、日本語を使うようになっていった。さらに学生間のコミュニケーションでも学習した文型を自主的に使うよう努めている様子が見受けられた。互いにわからないところを教え合い、助け合いながらクラスが一丸となって取り組んだ結果、コース初めには十分ではなかった初級文法の定着が確実に進んだ。

しかし、コース後半に扱う「受身」「使役」は既習ではあるが、正確に運用するレベルにまで練習を重ねることができなかった。後半の課には文法項目が多いため、その中で効率よく復習できるよう、今後は、テキストとは別に補助教材を準備したり、時間配分を工夫していきたい。

<後期>

日本語学習に意欲的な学生たちで、宿題、予習を十分に行ったうえで授業に臨むので、大変指導しやすいクラスであった。日本での日々の生活の中でも日本語や日本事情について学ぼうとしており、テレビ番組の中で聞き取った日本語、買い物に行ったときに疑問に思ったこと、アルバイト先での待遇表現の使い方など、授業や教科書以外にもさまざまな質問が出た。

真面目で熱心なクラスだったが、期末試験の結果、全体的に「受身」「使役」の理解が不十分であることが判明した。「受身」「使役」は、教科書の後半に取り上げる既習の文法項目であり、学生たちからも質問が皆無だったため、理解できているものと判断し、授業ではあまり時間をかけなかったが、もっと丁寧に復習する必要があったと考えられる。限られた時間ではあるが、「受身」「使役」の理解が深まるよう、効率的に復習する指導法を検討することが今後の課題である。

<J4 読解>

担当者名： 平山紫帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 10 名、後期 4 名

使用教材：独自教材

目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<前期>

授業は1週間に1課のペースで進行した。その日に扱う課の本文を読み、語彙を推測し、意味を調べるところまでを宿題として課し、授業ではまずピアワークを行ってお互いの理解を確認しあった。その後、クラス全体で内容の確認とディスカッションを行った。本文中の語彙に関しては、翌週に語彙テストを行った。

<後期>

今学期も先学期に引き続き個人作業は宿題とし、クラスでは学生同士で共働する時間と内容理解の確認、ディスカッションに時間をかけた。

結果と課題

<前期>

個人作業を宿題にしたことで、授業では内容についてより深く扱えるようになり、ディスカッションにも時間が取れるようになった。また、学生同士で行うピアワークは、お互いに理解できていなかったところを補い合ったり、内容について意見をぶつけ合ったりする大変有意義な活動になり、学生たちにも好評だった。しかし、この方法にした結果、宿題で読解を行う際にも語彙の推測をするように度々注意したにも関わらず、推測した語を書き込む箇所が空欄のまま授業に出てくる学生も見られた。こうした事態をいかに防ぐかが今後の課題である。

<後期>

ピアワークでは、当初はペアの片方だけが一方的に説明をしたり、お互いに黙ってしまったりするなど、活動がうまく機能していなかったが、ピアワークの意義と方法を再度説明したところ、次第に活発なやり取りが見られるようになり、内容の理解度も増していった。

しかし、このクラスは学期の後半に残念ながら帰国者が出てしまい、途中から3人のクラスになってしまった。すると、せっかくペアの時にできるようになっていた活発なやり取りが3人での活動になった途端に見られなくなり、話し手と聞き手の役割がはっきり分かれるようになってしまった。3人になっても積極的に意見交換ができるようにすることが今後の課題である。

<J4 聴解・会話>

担当者名：平山紫帆

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期12名、後期5名

使用教材：『新・毎日の聞きとり50日（上）（下）』凡人社

目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<前期>

1回の授業を3分割し、スピーチ、会話、聴解練習を行った。会話では、まず初級で学習した表現の復習や会話特有の表現（縮約形、助詞の省略、あいづちなど）の学習を行い、それらを使用する会話をペアで練習した。そして、ロールプレイなどを行い、その課で学習した内容の定着を図った。

聴解では、まとまった内容の聴解を行い、大意把握や、情報取りなどのタスクを行った。そして、一連の活動の後でその内容に関するディスカッションを行った。

<後期>

1回の授業を3分割し、スピーチ、会話、聴解を行った。今学期のスピーチでは、新たな試みとしてキャンパス内の大学生にアンケート調査を行い、その結果をまとめて発表するという活動を行った。会話では、ロールプレイの時間を増やし、自分たちの会話をICレコーダーで録音してそれをクラス全体で一緒に聞きながら会話の流れや表現を検討する時間を設けた。

結果と課題

<前期>

前期は快活な学生が非常に多く、終始和やかで楽しい雰囲気の中で授業を行うことができた。

スピーチでは、ユーモアを交えながらわかりやすい発表ができる学生が多かったが、スピーチに慣れていなかった学生も、最終的に自分の経験や意見を簡潔にまとめて話すことができるようになった。しかし、スピーチ後のディスカッションは、発表者と質問者だけのQ&Aになってしまったり、本題と関

係の薄い質問が出たりすることも多かった。スピーチの内容に即した質問ができるようになり、ひいてはそこから発展したディスカッションができるようになることを今後の課題としたい。

会話では、より自然な話し言葉で会話ができるようになった。しかし、話の進め方が強引だったり、出だしや終わり方に違和感を感じたりすることも度々あった。今後は談話全体の流れを意識しながら会話ができるように練習内容を工夫していきたい。

聴解では、大まかな内容は理解できていても、細かい情報取りができていなかったり、正確に聞きとれていない学生が多かった。ディクテーションなどを適宜取り入れたが、情報取りの練習は不十分であったと思われる。今後は学生に応じて練習内容をもっと柔軟に変更しながら授業を進めたい。

<後期>

スピーチは回を追うごとに滑らかに話せるようになってきた。アンケートをまとめて発表するという活動も、学生が興味のあるテーマを選び積極的に取り組んだために、内容的にも聞きごたえのあるいいスピーチになった。

会話では「なんとなく話せる」と思っていた学生たちが、自身の会話を聞き直すことによって客観的に振り返ることができ、より正確に、かつスムーズに話そうとする姿勢が見られるようになった。また、その会話中に使用されていた表現よりも適切な表現が他のクラスメートから提示されるなど、活発なやり取りが見られた。

しかし、今学期は振り返りに多くの時間を割いてしまったため、聴解を行う時間が短くなってしまったことがあった。今後は聞き直しの時間を設けながらも、全体の時間配分を見直していきたい。

<J4 作文>

担当者名：池田 伸子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 10 名、後期 名

使用教材：独自教材

目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけでなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400 字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

授業は 1 週間に 1 課のペースで進行した。すべてのレッスンは、初級文型を複数組み合わせさせた文型及び初中級レベルの文型を学習する第 1 部と、第 1 部で学習した文型を使ってパラグラフ程度の文章を産出する第 2 部に分かれており、どちらも授業時間内に完成させて提出させることを目指した。

授業で扱った文型は以下の通りである。

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1	①留学とは、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶことだ。 ②私が会社を辞めたことで、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人を人間的に成長させる。
Lesson 2	①最近、日本の大学生を見ていて気づいたことがある。 ②日本の経済が悪くなったのは、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」という考え方が、子供を非行に走らせたのだろう。
Lesson 3	①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の点から2つのグループに分類されると思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれているため、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験をその後の人生に役立てたいと思う。
Lesson 4	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとは、その食べ方や食べている種類が大変に異なっている。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5	①日本人は、間違った平等主義の方向に進もうとしている。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかせるなら、転職してもいいと思う。
Lesson 6	①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それはとてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。
Lesson 7	①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。
Lesson 8	①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは当然だと思う。

	③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。
Lesson 9	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10	①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。 ②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。 ③一度約束した以上、守らなければならない。
Lesson 11	①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

今年度前期の学生は、非常に積極的で質問も多く、各自が自分の間違いに対して自律的に直そうと心がけていた。そのせいか、テキスト外の文型や文法事項についても確認しながら授業を進めることができた。一方、後期の学生は、とてもまじめで真剣に課題に取り組んではいたが、積極性に欠け、あまり質問も出なかった。そのため、同じまちがいを何度も繰り返す学生が複数名見られた。やはり、授業中に、教師側から各自の間違いを意識させ、それを都度都度確認させていくような活動が必要であると思われる。これを今後の課題とし、次からは意識的にそのような活動を授業に組み込んでいきたいと思う。

2012年度「J5～J7 文法・文型」授業記録

コース概要

J5～J7の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週1回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5のレベルにおいては、日本語能力試験N2レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6のレベルにおいては、日本語能力試験N1レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験N1レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

授業は、教室における文法や文型の導入説明、簡単なドリル（短文作成）、導入した文型を使っての復習練習（宿題）から構成されており、学生の作った文章を担当教師がチェックしたり、学期の最後にReviewの時間を置くことで、学生の文法・文型理解を促進させるようにしている。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名： <前期> aクラス=長島明子、bクラス=平山紫帆 <後期>長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 aクラス 10名、bクラス 11名、後期 11名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<前期>

(aクラス)

授業は1回に1課のペースで進めた。まずプリントに沿って、文型の意味、接続の形、注意点、似ている文型・表現との違いなどを例文を挙げながら説明した。例文はプリントに載っているもののほか、そのときに話題になっていることや学生の関心のあるものなどを使ったものも提示した。その後、学習し

た文型を使って、簡単な例文を作らせた。毎回、学習した課の文型を使った短作文を宿題にし、翌週フィードバックをした。

(b クラス)

事前にテキストを配布し、学生が予習をした状態で授業を行った。毎回の授業では、テキストの例文やオリジナルの例文を使って内容を確認した後、練習問題をチェックした。また、単調な流れにならないように、適宜ペアワークなどの活動を取り入れた。テキストは1週間に1課のペースで進んだ。毎回、学習した文型を用いた短文作成を宿題にし、回収した翌週にフィードバックを行った。

<後期>

前期 a クラスと同様に進めた。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

毎回の宿題や試験を見ると、学習した文型の理解は概ねできており、毎回の宿題も時間をかけてよく考えたことが窺える学生が多かったが、一方で欠席が多く十分に基本的な理解できていない学生もいた。

宿題で間違いが多かった箇所は、翌週に全体または個々にフィードバックした。昨年度はフィードバックに時間が十分に取れなかった反省から、今期は時間を取るようにした結果、前期より改善されたと思う。しかし、間違いが多い学生にはフィードバックや復習が十分とはいえなかった。

今後は理解が十分でない学生の対応をどうするかが課題である。

(b クラス)

毎回、大量の文型を学習したが、学生たちは集中力を切らすことなく熱心に授業に取り組んでいた。初めのうちは宿題の例文が画一的で、辞書の例文のようなものが多かったが、自分の興味や関心に少しでも近づけて例文を書くように指示してからは、それぞれがより身近な内容で例文を書いてくるようになり、定着度も上がったように感じた。

今回学習した項目のうち、よく定着するものもある一方で、クラス全体の理解度の低い項目も見受けられた。今後は、授業中の時間配分を見直し、理解しにくい内容により多くの時間を割くことができるように工夫していきたい。

<後期>

毎回の宿題や試験結果を見ると、学習した文型の理解は概ねできており、毎回の宿題も時間をかけてよく考えたことが窺える学生が多かった。間違いは学習した項目の使い方は少なく、助詞や活用、語彙に関するものが多かった。

宿題で間違いが多かった箇所は、翌週に全体または個別にフィードバックした。しかし、時間が十分取れないこともあった。

今後は理解が十分でない学生への対応とフィードバックに十分な時間を取るようにすることが課題である。

<J6 文法・文型>

担当者名： 藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 15 名、後期 14 名

使用教材：独自教材

目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型の理解を目的とする。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	<p>「理由の表現」 ために、ばかりに、からといって／だからといって、あまり</p> <p>「目的の表現」 V んがため (に)、V-Volitional と</p>
2	<p>「感情・心情・評価の文型」 ～てしようがない／～てしかたがない／～てならない、～てたまらない、～限りだ、～といたらない (～ったらない)、～ずにはいられない／～ないではいられない、～ずにはおかない／～ないではおかない、～てやまない、～極まる／～極まらない／～の極みだ、～の至りだ</p> <p>「評価の文型」 ～だけに、～だけあって、～にしては／それにしては、～のわりに (は) ／～わりに (は) ／そのわりに (は)</p>
3	<p>「不快を表す文型」 ～だらけ、～まみれ、～がましい、～たらしい (～ったらしい)、～にもほどがある、～にたえない</p> <p>「非難・軽蔑を表す文型」 ～ぶる、～じみた、～っぽい、～くせに (くせして)、～なんか／～なんて、～ごとき、～ときたら、～にひきかえ／それにひきかえ、じゃあるまいし (ではあるま</p>

	いし)、Noun+に (として) あるまじき+Noun
4	<p>「判断を表す文型」</p> <p>～までもない／までのこともない、～には及ばない、～にはあたらない、～ほどのこと (もの) ではない、～かねる、～っこない、～にすぎない、～ないことはない、～までだ／までのことだ、～如何だ／～如何で・によって V、～次第だ／～次第で V、</p> <p>「理性的評価を表す文型」</p> <p>～に足る／値する、～に恥じない</p>
5	<p>「推察・推量を表す文型」</p> <p>～にほかならない／～にほかならぬ+Noun (人)、～にかたくない、～がたい、～かねない、～恐れがある、～ないとも限らない、～まい、～と見える、～げ</p>
6	<p>「人や物の状態・性質を表す文型」</p> <p>～のきらいがある、～がちだ、～気味だ、～つつある、～たてだ、～かけだ、～っぱなし、～まま、Aかたわら B、A がてら B、Aかたがた B、A ついでに B</p>
7	<p>「人や物の状態・性質を表す文型 2」</p> <p>～向きな、～向けな、～ごろ、～盛り、～めく、～つく、～たつ、～放題、～なり、～さ、～み</p>
8	<p>「義務・当然を表す文型」</p> <p>～べきだ、～べきだった／～べきではなかった、～べく～、～べくして～、～てしかるべきだ、～ (ない) わけにはいかない、～しかない、～ (より) ほか (は) ない／～ (より) ほか～ない、～ざるをえない、～ないではすまない／～ずにはすまない／～なしにはすまない～を余儀なくされる／余儀なくさせる</p>
9	<p>「その他の文型 1」</p> <p>～かいがある／～がい、～きつての、～ぐるみ、～こそ、～からこそ／～ばこそ～んです、～てこそ、～こそすれ、～ずじまい、～たりとも～ない／～な (禁止)、～ふりをする、～たことにする／～たことになる</p>
10	<p>「その他の文型 2」</p> <p>～だに～ない、A くらいならむしろ B 方がいい／方がましだ／～なさい、A (という) よりむしろ B、せめて～だけでも (いいから) ～、～つ～つ、～つける、～こなす、～慣れる、～抜く、～通す、～切る、～尽くす、～終わる、～終える、～やむ、～始める、～出す</p>

授業の方法

授業は、文法テキストに沿って進め、各課 13 項目程度の文法項目を扱った。テキストは、1 週間に 1

課進め、1 課終わるごとに次週の分を配付した。授業では、前半に文法項目の導入と例文や語彙の説明を行い、後半にテキストにある文法問題を解かせて答え合わせを行った。また、次週までの宿題として、毎回学習した文法項目を含む短文を書かせて提出させた。

結果と課題

<前期>

前期クラスは、予習を十分にしてくる学生が多く、学生の理解もはやかった。

授業では、文法項目の他に、例文に使われている語や慣用句に対する質問も多くあがった。そのため、解説に時間がかかってしまい、文法問題の答え合わせに時間がかけられないこともあった。そこで、文法項目の予習だけでなく、語の意味も調べてくるように、再度学生に促したところ、答え合わせにも時間がかけられるようになった。

反省点としては、新しく導入した項目の練習が不十分であったことがあげられる。文法項目が定着しているかを確認する機会は、テキストの文法問題と宿題の短文作成のみであった。そのため、試験では語形の間違いなど、基本的な点での間違いも見られた。今後は、新規項目の導入後にパターンプラクティスを行うなど、各項目の定着を確認できる機会を今よりも増やしていきたい。

<後期>

後期クラスは、自習を積極的にしてくる学生が多く、スムーズに授業を進めることができた。

前期の反省点として、どの文法表現にどの語形を使うのかということが定着しておらず、試験で間違える学生が多くみられたことを挙げたが、この点を改善すべく、後期では、教員が板書する内容を改善し、学生には積極的にノートをとることを促した。その結果、試験で語形の間違いをする学生が減り、高得点をとる学生が多かった。

今後の課題として、類義表現が使い分けられるようになるための指導方法を考えていきたい。短文作成の宿題で、類義表現の使い分けができていないと思われる学生が多くみられた。この点を改善するため、解説や練習を今よりも多く取り入れる必要があると考える。

<J7 文法・文型>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 16 名、後期 12 名

使用教材：独自教材

目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	<p>①いつも<u>ながら</u>鮮やかなお手並みですね。</p> <p>②みんなに「へたくそ」と馬鹿にされ<u>ながら</u>も彼は頑張り続けた。</p> <p>③この肉は生の<u>まま</u>で食べられます。</p> <p>④彼女はいくつになっても美しい<u>ままだ</u>。</p> <p>⑤命令される<u>まま</u>に動く。</p> <p>⑥悪いと知り<u>つつ</u>、つい落とし物の財布を自分のポケットにしまい込んだ。</p> <p>⑦地球人口は年々増え<u>つつある</u>。</p>
2	<p>意向形</p> <p>①彼に相談<u>しようか</u>すまいか、さてどうしたものだろう。</p> <p>②何が<u>あろうと</u>、決して驚いてはいけないよ。</p> <p>③行こうが行く<u>まいが</u>、参加費はもらうよ。</p> <p>語彙とニュアンスの似ている表現 迂闊な、機嫌、体裁</p>
3	<p>「ところ」</p> <p>①喉が痛くて、食事<u>どころか</u>水を飲むのも辛いんだ。</p> <p>②あっ、危ない！危うく車にひかれる<u>ところだった</u>。</p> <p>③私から連絡を取ろうと思っている<u>ところに</u>、ちょうど当人から電話がかかってきた。</p> <p>④今朝のニュースで聞いた<u>ところによると</u>、内閣は総辞職するとのことでした。</p> <p>⑤敬語が使える<u>ところまで</u>来れば、もう日本語も上級だ。</p> <p>語彙とニュアンスの似ている表現 苦情／不平不満／文句／クレーム／愚痴</p>
4	<p>「まで」</p> <p>①喉元<u>まで</u>出かかった言葉だったが、思いとどまった。</p> <p>②家に帰って<u>まで</u>、会社の仕事はしないでほしいわ。</p> <p>③あなたがやれと言ったから、やった<u>までのこと</u>です。</p> <p>④これは簡単な漢字だから、辞書を引く<u>までもない</u>。</p> <p>とりたての助詞 こそ、も、とか</p>
5	<p>「時」を表す文型 1</p> <p>①歳を取ると物覚えが悪くなり、聞く<u>そばから</u>忘れてしまう。</p>

	<p>②ベルが鳴るが<u>早い</u>か、彼は教室を飛び出した。</p> <p>③彼女は私の顔を見る<u>や否や</u>、涙を浮かべて駆け寄った。</p> <p>似ている意味の使い分け</p> <p>空き／空（から）、あたかも／いかにも</p> <p>色々な意味を持つ動詞</p>
6	<p>「時」を表す文型 2</p> <p>①ホームに着く<u>か着かないかのうちに</u>、発車のベルが鳴り出した。</p> <p>②その手紙を読む<u>なり</u>彼は顔面蒼白になった。</p> <p>③彼女は私の顔を見たと<u>たんに</u>泣き出した。</p> <p>④転んだ<u>弾みに</u>頭を壁にぶつけて、たんこぶができた。</p> <p>まとまりで覚えたほうがいい表現</p> <p>①給料が安くても、この会社で働く<u>よりほかに</u>、家族を養う<u>方法はない</u>。</p> <p>②ずっとたばこを吸い続けている<u>と</u>、周りの人に迷惑をかける<u>ばかりでなく、ひいては死につながりますよ</u>。</p> <p>③心を込めて謝った<u>ので</u>、それほど叱られないで済んだ。</p> <p>④こんなに天気が悪かったら、誰だ<u>って外に出たくなくなる</u>。</p> <p>⑤こんなに古い傘<u>だが、どんなぼろぼろの傘でもないよりはずっとましだ</u>。</p> <p>⑥授業中にあくびをするの<u>は</u>、やる気のなさの<u>現れだと</u>解釈できる。</p>
7	<p>「時」を表す文型 3</p> <p>①調査結果がわかり<u>次第</u>、そちらにご報告いたします。</p> <p>②この写真を眺める<u>度に</u>、昔のことが思い出される。</p> <p>③不景気のニュースを聞くにつけ、バブルの頃が懐かしく思い出される。</p> <p>④良きにつけ悪きにつけ、親は<u>巣立っていく子どもを見守ることしか</u>できない。</p> <p>⑤上京の折には<u>ご一報</u>ください。</p> <p>⑥<u>非常の際</u>には、このドアから避難してください。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①彼は教科書を読み<u>もしないで</u>、授業が難しいと文句ばかり言っている。</p> <p>②彼はその車をととても大切に<u>して</u>いて、誰かが<u>少しでも</u>触ろうものなら、すぐ怒る。</p> <p>③<u>今度の失敗も、考えようによっては</u>彼にとっていい薬になったはずだ。</p> <p>④このカバンが偽物<u>であることは</u>、誰の目にも明らかだ。</p> <p>⑤休みがあるのはうれしいが、何もすることがなくて、<u>暇をもてあまして</u>いる。</p>
8	<p>「時」を表す文型 4</p> <p>①やり<u>かけた</u>ことは最後までやり通せ。～かけだ／～かける／～かけの</p> <p>②近くを通り<u>しな</u>に、ちょっとなじみの飲み屋に寄った。</p>

	<p>③そのマラソン選手は、ゴール<u>間際</u>で倒れた。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①経済的に許されるなら、仕事なんかしないで家で遊んでいるに<u>越したことはない</u>。</p> <p>②先生がやさしいのをいいことに、全然宿題を出さない学生がいる。</p> <p>③彼女のがさがさの手は、これまでの彼女の苦勞を<u>物語っている</u>。</p>
9	<p>複合動詞</p> <p>①寝坊して、いつもの電車に乗り<u>損な</u>ってしまった。</p> <p>②私はあなたの発言の意味を取り<u>違</u>えていました。</p> <p>③うーん、食べ<u>過ぎ</u>た。お腹がパンクしそうだ。</p> <p>④彼女はカラオケで日本の歌を歌い<u>まく</u>った。</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①静かなので勉強しているの<u>かと思</u>いきや、ぐうぐう寝ていた。</p> <p>②必要とあれば、いかなる援助もいたしまし<u>よ</u>う。</p> <p>③東京公演を<u>皮切</u>りに、そのグループは全国各地でコンサートを開くらしい。</p> <p>④警察の取り調べは厳しく、現在の給料から過去の借金の額に<u>至</u>るまで調べられた。</p> <p>⑤今年を<u>限</u>りに社長職を退き、後進に道を譲ろうと思う。</p> <p>⑥後日、書面を<u>も</u>って連絡いたします。</p>
10	<p>副詞の呼応</p> <p>①たとえ冗談<u>でも</u>、言っているいいことと悪いことがある。</p> <p>②もし失敗した<u>ら</u>失敗した<u>で</u>、その時また考えればいいさ。</p> <p>③誰<u>であ</u>れ、欠点の一つや二つは持っています。</p> <p>④専門家<u>なら</u>いざ知ら<u>ず</u>、素人ではこの機会を修理することはできないよ。</p> <p>⑤注意されて謝る<u>なら</u>まだしも、逆に開き直っている。</p> <p>覚えたほうがいい文型</p> <p>①こんな成績では進学は<u>おろ</u>か、卒業だって危ないよ。</p> <p>②商いの成否は料金も<u>さ</u>ること<u>な</u>がら、サービス如何で決まる。</p> <p>③山の多い地形と島国という環境が<u>相</u>まって、日本人の性格を形成している。</p> <p>④集めたデータ<u>を</u>踏<u>ま</u>えて、レポートの内容を考える。</p> <p>⑤借金に借金を重ねたあげく、ついには夜逃げまでし<u>で</u>かす始<u>末</u>だ。</p>

授業の方法

授業は1回に1課のペースで進行した。各課は、新しい文型を扱う1部と、語彙、ニュアンスの似ている表現、覚えたほうがいい表現・文型などを取り上げる2部から構成されている。1部では、文型を説明し、例文を用いて理解を深めたうえで、文を完成させる練習を行い、その定着を促した。2部では、例文を用いて類似する語彙や表現を比較し、意味や用法の違いについてクラスでディスカッションした。

さらに毎回、導入した文型・表現・語彙を用いた短文作成を宿題にした。短文作成の宿題は個別にフィードバックをし、誤りの多い項目は、クラス全体でその用法を再確認した。

結果と課題

<前期>

大変意欲的で出席率のよい学生が大半で、円滑にクラスを運営することができた。宿題の短文にも大きな誤りがないものばかりで、学習した文型や語彙が確実に身についていた。授業では、文型、語彙、表現を導入するため教師の説明が主になりがちである。学生がより積極的に取り組めるよう、今後はピア活動なども取り入れていきたい。また、コース後半は導入項目が多くなり、学生が十分に理解できたかどうか確認できないまま、次に進まなければならなかった。定着、運用の確認が疎かにならないよう時間配分に留意したい。

<後期>

真面目で熱心な学生たちで、出席率や宿題の達成度も高いものであった。各課で取り扱う文型、文法項目はかなりの数ではあったが、学生たちが真摯に取り組んだため、クラスでは文型だけではなく、例文の中で用いられる語彙、表現、諺などにも説明を加えることもでき、ほぼ予定通り順調に各課を進めることができた。期末試験も総体的に高得点で、学習した文型や表現が確実に身についたと考えられる。

2012年度「J5～J7 読解」授業記録

コース概要

J5～J7の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5・J6では読解教材を取り上げ、様々なスタイルの文章を読むと同時に読むスキルを獲得する。また用語や表現を増やし、ディスカッションを行なう。J7では、新聞記事、社説、論説、小説などを取り上げ、内容理解をした上で要約することを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

<J6 読解>

担当者名：高橋雅子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期14名、後期9名

使用教材：独自教材

目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して

使用語彙、理解語彙を増やすとともに、さまざまな読むスキルを学ぶ。

授業の方法

<前期>

授業は1コマで1課を扱った。1課は速読と熟読に分かれており、教材は物語、説明文、新聞など生教材が中心であった。授業の進め方は、まず教材の中にある語彙や文型の説明をし、次に内容理解を行った。教材の内容によっては、ピア・リーディングを取り入れた。教材は基本的にその都度配布していたが、課によっては初級修了レベルの学生にとっては難易度の高いものもあり、事前に教材を配布し語彙調べを宿題にしたこともあった。

<後期>

授業は1コマで1課を扱った。前期の教材を改定し、中級前半レベルの市販の読解教材を参考に、物語文、説明文、エッセイ、新聞記事、パンフレットなど、毎回異なるスタイルの文章を扱った。また各課で目標とする読むスキル（スキミング、スキミング、精読など）を絞り、練習を行った。毎回、宿題として教材の中で自分にとっての未知語彙を抜き出し、語彙リストの作成を課した。次の授業で語彙リストの語彙を使用して短文作成のクイズを行った。

結果と課題

<前期>

初級が終了したばかりの学生と中級半ばレベルの学生がおり、文法力・語彙力に大きな差があり、文章の理解や内容質問の問題を解く速度に差が出た。また、使用教材も初級終了の学生にとっては難易度が高く文章の長さもボリュームもある教材もあるので、教材の改定が必要であろう。

<後期>

学習者間の文法力・語彙力のレベル差がほとんどなく、授業をスムーズに進めることができた。改定した教材もこのレベルの学習者に合っていたと思われる。速読が得意な学生、大意取りが上手な学生など、授業を通して各学生の読みの得意・不得意が見えた。学生にとっても今後の読解学習の各自の課題が見つけられたと思う。

<J6 読解>

担当者名：高橋雅子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期9名、後期10名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、さまざまな読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

教材は1週間に1課のペースで進めた。授業では、まずは辞書を使用せず文章を読み、内容理解の問題を解かせ、答え合わせを行った。読解の方法として、速読、精読、スキミング、スキニングを導入し、文章の内容や問題のタイプによって読み方を指導した。毎回、宿題として教材の中で自分にとっての未知語彙を抜き出し、語彙リストの作成を課した。次の授業で語彙リストの語彙を使用して短文作成のクイズを行った。また、学期の後半からは宿題として毎回テキストの要約を課した。

結果と課題

<前期>

学生間でレベル差があり、教材の内容理解や問題を解くスピードに差があった。しかし、学生は毎回、熱心に課題に取り組み、学期終了時には読解力がかなり伸びた学生もいた。しかし、課によっては扱っている文章の語彙・文型・内容が高度なため、授業で使用するのに工夫が必要であった。中級半ばレベルの学習者に合った教材の改定が必要であろう。

<後期>

学習者間の文法力・語彙力のレベル差がほとんどなく、授業をスムーズに進めることができた。改定した教材もこのレベルの学習者に合っていたと思われる。毎回の宿題の語彙リストの作成は、母語で意味の直訳を書くのではなく他の日本語で意味を言い換えたり、反対語・類義語を入れたり、各学生に工夫がみられ、語彙増やしの役に立ったと思われる。日本語や日本に対する興味・関心が高い学生が集まっていたので、外国語学習のための教材ばかりではなく、新聞や雑誌など生教材をもう少し多めに取り入れた方が読むことの楽しさを感じられたのではないかと思い、今後の課題としたい。

<J7 読解>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期13名、後期8名

使用教材：独自教材

目標

文学作品や専門的な雑誌記事などの長文を読み、その内容を理解し、自分の言葉で説明できるようになることを目標にする。

授業の方法

<前期>

コースを3つに区分し、前半は新聞記事や社説を、中盤は村上春樹の小説『海辺のカフカ』を、後半は論説文の教材を用いた。新聞記事は、まず見出し、写真、資料などを使ってプレリーディング活動をし、次に設問に答えることで記事の大意を理解させ、最後にピア・ワークによって段落ごとに精読を行い、記事の構成を把握するため段落の組み合わせを図式化する練習をした。『海辺のカフカ』は、タスクシートを作成し、単にプロットを追うだけではなく、登場人物の心情なども読み取る練習を行った。論説文は、テーマを日本社会に関するものに絞り、背景知識などの説明を加えながら内容把握の練習を行った。さらに毎回、新聞記事を200字～300字に要約することを宿題とし、授業冒頭に要約の宿題についてフィードバックを行った。

<後期>

コースを3つに区分し、前半は新聞記事や社説を、中盤は論説文を、後半は星新一の小説『夜のかくれんぼ』を教材として用いた。新聞記事は、まず見出し、写真、資料などを使ってプレリーディング活動をし、次に設問に答えることで記事の大意を理解させ、最後にピア・ワークによって段落ごとに精読を行い、記事の構成を把握するため段落の組み合わせを図式化する練習をした。論説文は、日本の食に関わる問題、グローバル化時代、環境問題など多様なテーマを取り扱い、背景知識などの説明を加えながら内容把握の練習を行った。『夜のかくれんぼ』は、毎回1作品を取り上げ、タスクシートを作成し内容を理解したうえで、作者の主張、作品の意図を読み取り、クラスでディスカッションを行った。さらに毎回、新聞記事を200字～300字に要約することを宿題とし、授業冒頭に宿題の要約についてフィードバックを行った。

結果と課題

<前期>

熱心な学生が大半で、出席率もよく、宿題も予定通り提出できていた。3種類の教材の中で、新聞記事が最も難しかったようで、コース初めは、記事の内容を理解するのが困難で、簡潔に要約することもできない学生がほとんどであった。しかし、練習を重ねて、記事の構成にも慣れ、見出しやリードを活用して新聞を読むスキルが身につく、コース後半には、記事を適切に要約することができるようになった。新聞記事は、政治、法律、社会生活などさまざまな分野から毎回1つずつ取り上げたが、政治、経済など専門的な記事は「おもしろくない」「内容が難しすぎる」など不評であった。学生たちの専門が多様なため、多数の学生が興味を持って読解に取り組めるような記事を選択することが今後の課題である。また、新聞記事には専門用語が多く含まれており、内容も平易ではないため、読解練習に時間の厳しい制限を設けなかったが、今後は速読の指導も取り入れていきたい。

<後期>

真面目な学生たちで、出席率も宿題の提出率も大変良かった。前期で扱った新聞記事が専門知識を要するものが多かったという反省を踏まえ、後期では日常生活や社会生活に関する記事を主に扱った。そのため学生たちは、前期より興味を持って記事の読解に取り組んでおり、宿題の要約からも内容が理解できていることが読み取れた。また小説の教材も前期の『海辺のカフカ』から『夜のかくれんぼ』に変更した。後期の作品は短編で、1 時限で読解するのに適した長さであった。タスクシートを通して内容の把握を確認した後、クラス全体で作品についての感想や作者の主張など意見交換する時間的余裕もあり、学生たちに好評であった。期末試験の結果も総体的に良く、さまざまな読み物に触れて、読解力が身についたことが伺える。

2012 年度「J5～J7 作文」授業記録

コース概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名： <前期>a クラス＝小松満帆、b クラス＝高橋雅子、<後期>小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 a クラス 12 名、b クラス 11 名、後期 10 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

10 課からなるテキストに基づき、レポートや作文の構成、必要な表現について学び、毎回 800～1000 字程度の作文を書かせた。また、フィードバックの時間を設け、個別にフィードバックを行った。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

丁寧に作文を書こうとする学習者が多く、学期開始当初は、構成を立てる、作文を書く、といった一つの作業に時間のかかる学習者が多かったが、授業を重ねるごとに、短時間で考えをまとめる、という作業に慣れ、徐々にスピードが上がっていった。授業開始時に、それぞれの目標を持って授業に臨む、という動機づけを行ったが、その結果、個々の学習者がきちんと目的意識を持ち、積極的に課題に取り組んでいた。初めはなかなかテーマが絞れず、きちんとした構成の立てられない学習者が多かったが、教師のフィードバックやコメントをきちんと見返し、それを直そうとする意欲の高い学習者が多く、作文を書くごとに、構成力が伸びていった。また、宿題の提出率も大変高く、お互いにいい影響を与えあう、とてもよい雰囲気のクラスであった。

課題としては、ブレインストームや導入、考えをまとめるのに時間がかかってしまったため、授業中に構成をまとめきれない学習者もあり、授業外課題が増え、学習者の負担が増えてしまったことだったので、今後は時間配分を工夫する必要がある。

(b クラス)

学期開始時は、「興味のないテーマは書きにくい」「黙々と作業をするのが嫌だ」など作文に苦手意識を持っている学生が目立った。授業では、ペアやグループによるブレインストーミング、学習者同士のフィードバックを取り入れ、深く考えること・読み手にわかりやすく伝えることの大切さや面白さを学べるように工夫した。その結果、作文の分かりにくさの要因に自分で気付いたり、作文表現のバリエーションを学生同士で学び合ったりしていった。作文に苦手意識を持っていた学生が伸びを見せた一方で、もともと作文が上手に書ける学生の成長があまり見えなかった。今後の課題として、作文がよくできる学生をさらに伸ばし、上級レベルにつなげるための教室活動を考えていきたい。

<後期>

協力的な学習者が多く、クラスの雰囲気がとてもよかった。作文はどうしても個人作業が多くなってしまいが、それでもお互いに助け合い、ともに力を伸ばしていこうとする姿勢が見られた。

学期当初は、書きたいことが多すぎて、構成がわかりにくかったり、言いたいことが伝わらない学習者が多く見られた。また、新しい文型を試してみることに消極的な学習者が多かった。しかし、熱心に課題に取り組み、教師のフィードバックやコメントをきちんと見返し、それを直していこうとする学習者が多く、こちらの指導した点を次の作文に反映させて書く学習者が多く見られた。そのため、作文を書くごとに書く力が伸びた学習者がほとんどであった。また、宿題の提出率も高かった。

反面、丁寧に書こうとする学習者が多く、総じて書くのに時間のかかるクラスであった。今後は、書くスピードを伸ばしていく、という点にも注目し、活動を工夫していく必要があると思われる。

<J6 作文>

担当者名： <前期>a クラス＝川端芳子、b クラス＝平山紫帆、<後期>a クラス＝川端芳子、b クラス＝穴澤孝子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 a クラス 9 名、b クラス 10 名、後期 a クラス 9 名、b クラス 8 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。

授業の方法

<前期>

(a クラス)

授業は 1 コマで 1 課が終了するペースで行った。授業では、まず復習として基本的な文法・語彙・文型などの練習問題をし、正確な日本語表現の確認をした。次に、各課の学習項目（図表の読み取り・引用など）を導入し、それをを用いて 800 字程度の意見述べの文章作成を行った。その際には各課のトピックに関する新聞記事等を扱ったり、クラスで意見交換をしたりするなど、問題を様々な視点でとらえ、考えが深められるようにした。学期後半では既習項目を使用した総まとめの学習として、特に全体の構成、論理性に留意した文章作成の練習をした。

(b クラス)

1 週間に 1 課のペースでテキストを進めた。クラスでは図表や引用の表現を身近なデータを用いて学習したり、課題の理解を深めるためにモデル作文のピア・リーディングや内容についてのグループディスカッションを行った。作文を書く作業は宿題にした。書き終わった作文については、提出の翌週に返却し、クラス全体や個別でフィードバックを行った。

<後期>

(a クラス)

授業は 1 コマで 1 課が終了するペースで進めた。授業時の最初に、まず、基本的な文法・語彙・文型などの練習問題を行い、正確な日本語表現の確認をした。次に、各課の学習項目（図表の読み取り・文章の要約・引用など）を導入し、それをを用いた 800 字程度の意見述べの文章作成を行った。その際には各課のトピックに関する新聞記事を扱ったり、クラスで意見交換をしたりするなど、課題内容を様々な視点でとらえ、意見述べの文章作成に生かせるようにした。学期後半では、既習項目を使用した総まとめの学習として、全体の構成、論理性、表現の正確さに留意した作文練習をした。

(b クラス)

テキストに沿って、1 回 1 課を基本に進めていった。

全体を通して、図表情報の取り入れ方と書き方、引用の書き方、意見の作り方、構成の考え方、などを中心に学んでいった。授業内では、自分の意見をまとめる練習として、ペアやグループで意見や構成を話し合い、発表をさせるタスクを取り入れた。そして、授業でまとめた意見や構成をもとに、1000～1200字で作文を書くことを各課の宿題とした。書いた作文内容は、全体でのフィードバックと個人的なフィードバックとを両方行い、苦手な部分を克服できるようにした。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

何度も文章作成の練習を重ねたため、作文の要領（文体、資料の説明、引用、構成など）にはだいぶ慣れ、まとまりのある文章が書けるようになった。しかし、論を効果的に展開させるための接続詞や文末の「のだ」の使い方など、まだ修正すべき点が学期全体を通して見られた。今後は誤用や学生が苦手とする部分を適宜採り上げ、プリント教材などで繰り返し確認し、一層のレベルアップを図っていきたい。

(b クラス)

テキストで扱った図表の説明や引用については、作文の中で効果的に使えるようになった。また、内容的にも深みのある文章が書けるようになった。しかし、せっかくオリジナリティーのある素晴らしい意見をもっているのに、構成が不十分なために書きあがった作文に説得力のない学生が数名見られた。

構成に学生の意識をもっと向けさせ、論理的で簡潔な構成が立てられるようになることを今後の課題としたい。

<後期>

(a クラス)

文章作成の練習を重ねていく中で、作文の要領（構成、資料の説明、引用など）はだいぶつかめるようになり、課題の字数でまとまりのある文章が書けるようになった。しかし、論を効果的に展開させるための接続詞や視点や時制に関わる動詞の使い分けなど、既習の文法事項が上手く作文に反映できず、表現の修正や文法の復習が必要な学生も見られた。今後は誤用や学生が苦手とする部分を適宜採り上げて確認するとともに、文章全体の論理性と的確な表現の関係性の視点も取り入れ、完成度の高い文章作成を目指したい。

(b クラス)

宿題はほとんど全員期限内に提出し、こちらで注意したことも修正できる学生が多かったので、あまり問題はなかった。全体的なフィードバックだけでなく、個人的にも細かく考えを聞きながらフィードバックをしていったため、それぞれ自分の苦手な部分を修正していくことができたと思う。しかし、1

日1つのテーマでは時間が足りないこともあり、意見の組み立て方の練習がなかなか思うようにいかなかったため、構成がもう一歩という学生も何人かいると思う。今後はコース全体の時間配分も工夫して授業を進めたい。

<J7 作文>

担当者名：小島佳子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期10名、後期12名

使用教材：独自教材

目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

授業は2回で1課のペースで進行し、1課ごとに1200字程度のレポートを全部で5つ書いた。1課の前半週は課題文を読み、ディスカッションを通して思考を深め、自分のレポートの論点と構成を考えた。そして、次回の授業までに各自関係資料を探し読んでくることを宿題とした。課の後半週は、読んできた資料について少しシェアしてから個々に構成を練り直して個別に見ていき、構成が終わったらレポート書きに入った。そして、レポート完成を宿題とし、次回の授業時に提出した。また、テキストの短文作成部分は毎回予習宿題とし、授業冒頭で扱った。

結果と課題

<前期>

学生は、これまで作文として長い文章を書く練習はしてきたが、レポートや小論文のような学術的文章を日本語で書いた経験が少なく、序論・本論・結論に分けて構成を立てていくことや、論拠に基づいて主張を述べることなどに戸惑っていた。そのため、初めは資料で調べたことをまとめたレポートが多かったが、回を重ねるごとに、構成を意識し、論拠・主張などが明確に書けるようになっていった。しかし、今期は授業内で構成を完成させる学生が少なく、構成をチェックできずにレポート執筆に至ることが多かったため、構成不備による流れの悪さが目立った。そのため、後半では構成も宿題として提出させたが、レポート執筆後に書いた構成が多く、構成段階における熟考の重要性を十分認識させられなかった。そのため、今後は、授業内での構成の完成はもちろん、さらに構成を熟考できるような工夫をしていきたい。

<後期>

学生は、これまで作文として長い文章を書く練習はしてきたが、レポートや小論文のような学術的文章を日本語で書いた経験が少なく、序論・本論・結論に分けて構成を立てていくことや、論拠に基づいて主張を述べることなどに戸惑っていた。また、レポートの書き方が、日本とこれまで教育を受けてきた国とで異なるため、本授業で要求されていることがなかなか理解できずに苦しんでいる学生もいた。しかし、学期後半から要求されていることを理解し始め、学期終了時には、個々に全員が素晴らしい成長を見せ、それが成績にも現れていた。しかし、レポートの書き方を理解するまでにかなり時間を要し、その間、苦しみながら課題をこなしていた学生もいた。そのため、今後は、本授業で要求されていることを初期に明確に伝えられるよう工夫していきたい。

2012 年度「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コース概要

聴解・会話は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。週 1 回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイなどを学生が自ら進んで行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが求められる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<前期> a クラス＝藤田恵、b クラス＝小松満帆、<後期> a クラス＝藤田恵、b クラス＝保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：前期 a クラス 8 名、b クラス 8 名、後期 a クラス 6 名、b クラス 6 名

使用教材：梶本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版
宮城幸枝他『毎日の聞き取り plus40』凡人社

目標

J5 は初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

授業は、1 コマを①聴解、②会話、③ショートスピーチに分けて行った。

- ①ショートスピーチ：グラフの説明と分析結果を述べるものであり、2～3分程度のものを1人2回ずつ行った。また、スピーチの後には、ディスカッションを10分程度行った。1回目は教師がグラフを用意し、2回目は自由なテーマでグラフを選ばせた。
- ②会話練習：『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』1～3課を使用し、内容を聞き取り、重要表現を学び、その表現を使って会話を作る、という流れでクラスを進めた。会話はペアで練習し、発表させた。
- ③聴解：『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』1～3課を扱った。

結果と課題

<前期>

(a クラス)

前期の a クラスは、語彙力が低い学生もいたため、聴解では、音声を聞く前に語の意味の確認を丁寧に行うようにした。

会話発表、ミニスピーチ、ディスカッションでは、発表が1回終わるごとにフィードバックを行った。フィードバックでは、発音、発表内容の構成、発表時の姿勢など、学生が不得意としている点を中心に指摘し、改善できる練習方法も提示するように心がけた。その結果、学期が進むにつれて、上手に発表できる学生が増えていた。

今後の課題としては、聴解では、未知語がある場合でも前後の内容から意味を類推して音声を聞く練習をする必要があると考える。会話では、友人同志や会社関係など、相手に合わせた言葉づかいができるように、様々な場面での会話練習をさせる必要があると考える。

(b クラス)

ショートスピーチでは、1回目はグラフの説明に終始し、分析や自分の意見のない学生が多かったが、フィードバックやクラスメートからのコメントを受け、2回目には内容の濃いアカデミックな発表ができた。

会話練習では、場面に合った適切な会話を作るのに長けた学生が多く、また、クラスの雰囲気もよかったため、いろいろとチャレンジした会話を作り、発表することができた。

スピーチや会話などへの質問やコメントから発展し、意見を交換するような場面が多く見られ、学生が相互に影響し合い、それぞれが伸びたと思う。また、発音に興味のある学生が多く、その指導も適宜行った。しかし、その結果、聴解練習に使う時間がなかなか取れなかったため、今後は時間の使い方を工夫する必要がある。

<後期>

(a クラス)

後期の a クラスは、聴解力が高く、聴解の音声を一度聞いただけで、内容が理解できる学生が多かつ

た。ミニスピーチでは、1回目は教員がグラフを用意したが、2回目は学生が用意することとし、テーマは制限しなかった。学生からは、自分が発表したい内容を扱うことができよかつた、専門分野の発表の練習ができよかつたといった感想が述べられ、発表テーマが自由に選べたことは好評であつた。

会話では、伝言、勧誘、許可求めの3つの場面で使用する表現を扱つた。後期の学生は、サークル活動、旅行、アルバイトなど、授業外でも日本語で会話する機会が多く、授業で扱つた表現を実際に使つたと述べる学生が多かつた。その際に、日本語母語話者との会話で理解できなかつた言い回しを報告する学生もおり、その解説を行うことで、授業で扱つた内容を発展させることができた。

今後の課題としては、敬語を使う場面の練習を増やし、敬語が使いこなせるようにさせることが挙げられる。友人同士の日本語会話には困らないが、アルバイトなどで使用する敬語に苦手意識を持っている学生が多かつた。授業外で日本語を使用することが多くなり、敬語を使用する機会も増えてくるレベルであると考えられるため、敬語の練習も多く取り入れていきたい。

(b クラス)

教科書の難度が学生の日本語のレベルに合つていたため、内容理解が全くできないということはなかつたが、未習の語彙が多い、または、発話のスピードが速すぎる等の理由で内容の理解に苦しむ様子も見られた。文型の習得の際には、これまで日常的に耳にしていたが、文法的に理解していなかつた表現を学ぶ機会となり、有意義な活動になつたと思われる。また、表現を習得した後に、会話の作成を行なつたが、この活動を通して、新出文型に対する理解を確かめられるとともに、化石化している誤用についてももう一度指導することができた。

スピーチはみな非常に意欲的で、入念に準備をし、発表に臨んだ様子がかうかがえた。発表の後のディスカッションも大変積極的かつ協力的で、内容の濃い話し合いができたように思う。

<J6 聴解会話>

担当者名： <前期>御子神佳奈、<後期> a クラス=御子神佳奈、b クラス=保坂明香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：前期21名、後期 a クラス7名、b クラス6名

使用教材：三井豊子・堀歌子・森松映子『ニュースで学ぶ日本語パート2』凡人社

荻原稚佳子・斉藤真理子・増田真佐子・伊藤とく美『日本語上級話者への道 ―きちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク

目標

日本語学習者向けに編集されていない教材を適宜用いながら、生の日本語に触れることによって実践的な力を身につけていく。授業では、テープやビデオなどの教材を用い、それらの内容把握、そしてそれについてのディスカッション等を行う。

授業の方法

<前期>

聴解は2クラスで1課のペースで進めた。授業では、どのような内容のCDを聞くのかを見出しから推測させ、関連語彙の導入を行った上で、聞き取りの練習問題を行った。練習問題の後にはスクリプトを配布し、それを見ながらCDを聞き、全体の内容をもう一度確認した。最後の3クラスでは生のニュースを聞かせた。

会話は3クラスで1課のペースで進め、1課が終わるごとに語彙や表現のクイズを行った。授業では、新しい言葉や表現を辞書も用いて学習し、それからペアやグループでそれらの言葉や表現を使った会話の練習を行い、クラス全体で発表という流れで進めた。

<後期>

聴解、会話については前期と同様であるが、後期は2セクになったため、これらに加えスピーチを行った。スピーチは、学期中1人2回行ない、スピーチの後にはディスカッションの活動をした。持ち時間は1人10分間で質疑応答も含め、進行、時間配分などの全てがきちんに行えるよう指導した。また、スピーチ後には個別にフィードバックを与えた。

結果と課題

<前期>

聴解は、既習の語彙によって、聞き取りが難しい課とそうではない課があったようである。学生に馴染みのある内容の課は比較的聞き取り易かったようだが、逆に馴染みのない内容の課では、そのトピックに関する語彙量も乏しく、理解が困難であったように思われる。聴解を通して学生の語彙の種類や知識を豊富にし、聴解に限らず、様々なトピックに学生が対応できるよう、授業を工夫できればと思う。

会話は、今学期は学生数が今まで以上に多く、教師がなかなか学生一人ひとりに対応することができなかった。いかにして大人数に対応するかということが、またしても課題となってしまった。今後は、スピーチや口頭試験なども取り入れ、もう少し丁寧に個々に対応できればと思う。学生は積極的に授業に参加し、学生間でも活発に活動が行われていたので、学生が参加しやすい環境ができていたことは良かった点と言えるだろう。

<後期>

(a クラス)

聴解は、言葉の意味がわからなくても音は正しく聞き取れているなど、耳が良い学生が多く、教科書の問題はよく理解できていることが多かった。生のニュースを聞かせたときは、アナウンサーの声は聞き取り易いが、一般の人へのインタビューの箇所が聞き取りにくいようであった。比較的よくできる学生が多い学期では、アナウンサーや教科書の問題のように聞き取り易く話されているものばかりでなく、自然な日本人の会話などをもっと聞かせ、より実践的な力が付くよう指導していきたい。

会話では、学生側から日本人の話し方についての質問がでることもあり、日本人だったらどのように言うだろうかということを考えながら効率よく学習が進んでいった。今回、普段あまり日本人と話す機会がないという学生が多かったが、このような学生にとっては、日本語でディスカッションが行われるこのクラスの時間は、とても有意義なものになっていたようである。今後はこのような学生のために、例えば日本人学生のボランティアを募り交流の時間を作るなど、もっと日本人と実際に話す機会が設けられるよう考えたい。

(b クラス)

聴解教材は、未習の語彙が多く難しかったようだが、発話のスピードや話し方等が障害となり聞き取れないということはなかった。

会話でも、わからない点は語彙のみで、内容はよく理解し練習していたが、このクラスは意欲的ではあるものの大変消極的で、会話の活動が積極的に行なわれることはあまりなかった。スピーチの後のディスカッションも同様で、司会者が意見を聞くと、その問いに対しては答えるのだが、自分から意見を述べる、あるいは、他の参加者に対して自分の考えを説明するということはあまり見られず、話し合いによって理解や内容が深まることもあまりなかった。スピーチはよく準備をして、発表に臨んでいた。

<J7 聴解会話>

担当者名： <前期>高村めぐみ、<後期> a クラス=高村めぐみ、 b クラス=山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：前期 11 名、後期 a クラス 6 名、 b クラス 6 名

使用教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子『日本語超級話者へのかけはし
ーきちんと伝える技術と表現ー上級から超級へ』スリーエーネットワーク

目標

日本語学習者向けに作られた教材ではなく、生の教材を用い、日常生活だけでなく講義や講演など、やや専門的な内容も聞き取れることを目指す。また、改まった場面での会話のスキルも向上させる。

授業の方法

<前期>

授業は、おおむね隔週で、DVD を使った「聴解・ディスカッション」の日と、会話テキストを使って展開する「会話」の日に分けて進めた。

聴解・ディスカッションでは、たくさんの生教材に触れることによって、高度な内容の日本語が聞けること、そしてそれに関する意見が言えることを主眼に練習を行った。具体的には、まず社会問題、経済問題等、その日のトピックについて、自分が持っている情報をクラスメートと共有し、次に、DVD を視聴しながら、新出語彙、表現の導入を行った。最後に、再度テーマについてのディスカッションを

行い、グループで出た意見をまとめ、代表者が発表するという形式で進行した。また、毎回 DVD の要約、自国との比較等についてのレポートを宿題にした。

会話では、友達同士の会話ではなく、「きちんとした日本語」で自分の意見を伝える練習を行った。例えば、その日に取り上げる会話の内容、場面、相手を提示し、それに相応しい表現、語彙をグループで話し合った。その後、会話例を提示し、それを自分達で応用し、会話練習を行った。

<後期>

前期と同様、「聴解・ディスカッション」、「会話」のほかに、「プレゼンテーション」も 2 回行なった。これはモノログによる口頭発表の能力向上を目的に行なった活動である。プレゼンテーションは、「聴解・ディスカッション」で視聴した DVD のテーマから各自選択し、5 分程度発表した。その後、ディスカッションを行なった。また、グラフや表を分析し、各自の考察をパワーポイント及び発表原稿にまとめることを課題として与えた。

結果と課題

<前期>

聴解の授業では、日本の社会問題を多く取り上げ、ディスカッションすると同時に、知識を増やすような授業構成にした。非常に積極的かつ真面目で仲が良いクラスのため、ディスカッションが例年以上に活発に行われていたのが印象的である。また、クラスメートの発言に対して、ほかのクラスメートが反論する場面も見られ、有意義なディスカッションが展開されていた。

会話についても、敬語や表現といった表面的な知識をインプットすることに終わらず、学生の方から、なぜそのような言い回しをするのかといった日本文化、日本の習慣に関わる疑問も出てきていた。さらに、それを教師が答えるのではなく、学生自身が答えを発表することも多く、かなり掘り下げた議論に発展することもあった。今後も、学生が積極的に参加をする授業を展開していきたい。

<後期>

(a クラス)

後期は 2 セクになり、6 名の小さなクラスで授業を行うことができた。そのため、教師から見た各人の直した方が良い点、例えば細かい単音の発音などについても、丁寧に拾い上げて指導をすることができるようになったのが大変良かった。プレゼンテーションの準備段階ではピア活動を多く取り入れた。クラスメートとの間にラポール形成がされていたため、お互いが忌憚ない意見を述べ合うことができ、どんなことでもきちんと指摘しあえることが出来た。教育効果の高い練習を取り入れることが出来たのではないかと考える。

(b クラス)

J7b クラスは、先学期より継続の学生 5 名、新規の学生 1 名であったが、特に継続の学生は、学期中

盤辺りより、自国での卒業論文やレポートの課題、あるいは日本での他の授業のレポート執筆の関係で、一時期、授業への出席や宿題提出が困難な様子が見られた。DVD の視聴、ディスカッション、プレゼンテーション、教科書を用いた学習など、様々な活動があることには、概ね好評であった。宿題の一つであるレポート（要約、及び自国との比較・意見）は、的確に情報を捉えて要約し、自国との比較・意見も独自性が見られる学生と、内容・量ともに簡略化し過ぎる傾向のある学生がいた。今後の課題として、各学生の状況をみながら宿題の量を考えるとともに、要約が不得意な学生への対応を考えたい。

2012 年度 J8 授業記録

コース概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の文化・社会>

担当者名：田中望（池袋）、丸山千歌（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 10 名、後期 3 名、（新座）後期 2 名

使用教材：

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後のまとめとしてレポートを提出する。

新座キャンパス開講の日本の文化・社会 C については、「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

授業で取り上げた各トピックについて、DVD や新聞記事などの複数の教材を使用して、各自が理解を深めた。

新座キャンパス開講の日本の文化・社会 C は、ゲストスピーカーの講義の前 1 コマを事前学習、講義の後の 2 コマを事後学習にあてて展開したが、受講者数が少ないうえに出席が安定せず、ゲストスピーカーの講義を最大限に生かしたとはいえない点が課題として残った。

<日本語の諸相>

担当者名：長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 4 名、後期 3 名

使用教材：独自教材

目標

一つの言語としての日本語を取り上げ、他の言語と比較した場合に特徴的な日本語の側面を理解する。擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相や役割語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査したりする。

授業の方法

<前期>

日本語の擬音語・擬態語について、新聞、広告、漫画、エッセイ、小説などいろいろな分野で、実際にどんな擬音語・擬態語がどのように使われているか分析した。また、擬音語・擬態語の特徴などについて書かれた本を読み、内容について発表し、話し合った。

コース開始時にどんなことを勉強したいかと聞いたところ、全員が「敬語」を挙げたので、後半の 4 回を敬語にあて、お知らせや依頼の手紙の書き方などを扱った。最後に日本語の擬音語・擬態語に関して調べたことの発表を行った。

<後期>

初めの 5 回は敬語や配慮表現を取り上げ、相手に配慮した依頼、お礼、お詫びなどのメールの書き方を指導した。次の 9 回は日本語の擬音語・擬態語を取り上げ、小説、エッセイ、広告、料理、マンガなどいろいろな分野で、実際にどんな擬音語・擬態語がどのように使われているか分析させ、学習した擬音語・擬態語を使って、作文を書かせた。また、擬音語・擬態語の特徴などについて書かれた本の内容について発表及びディスカッションを、最後に日本語の擬音語・擬態語に関して調べたことについて発表をさせた。

結果と課題

<前期>

この授業を受ける学生は日本語能力は高いものの、擬音語・擬態語についてはあまり使っていない。授業を受けて、擬音語・擬態語に対して理解は増したようで、日常生活での会話や、小説、まんがに出てくる擬音語・擬態語に注意が向くようになった。

敬語については、尊敬語や謙譲語や敬意表現をいろいろ知ってはいるが、適切には使えないことがあった。授業を通して擬音語・擬態語も敬語も理解や知識は深まったが、練習が足りなかった。

今後は運用力向上に結びつく活動を授業にもっと取り入れたいと考えている。

<後期>

今期の学生は日本語能力が高いだけでなく、日本の文化や事情についてよく知っていた。敬語・配慮表現については、全員尊敬語や謙譲語や敬意表現をいろいろ知っていたが、運用力では差が出た。言葉が足りず、相手に伝えたい内容が十分伝わらないことがあった。擬音語・擬態語については知らない語彙も多くあり、授業を受けて、擬音語・擬態語に対して興味や理解が増したようである。

今後は自分の伝えたい内容をきちんと伝えられる運用力の向上に結びつく活動を授業にもっと取り入れたいと考えている。

<日本語論文読解>

担当者名：栗田奈美（池袋）、谷啓子（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 5 名 （新座）前期 3 名

使用教材：独自教材

目標

日本語で書かれた学術論文の内容が読めることを目指し、日本語論文の構成語彙などについて学ぶ。

授業の方法

大きな流れとしては、以下の通りである。

前半：教師から提示されたサンプル論文や、個々の専門分野で探した論文を素材に「論文の構成」を把握する。

後半：担当する自分の専門分野の論文をフローチャート化して発表する。

最終課題：担当論文についての詳細なレジユメの作成とゼミ形式での発表とディスカッション

各回において、「論文とは何か」「論文の探し方」→担当論文の紹介（第1～2週）→「三部構成」「序論・本論・結論の役割」図表の説明→サンプル論文や担当論文で確認（第3～7週）、「参考文献や引用のルール」「研究方法」（第8～9週）を扱い、論文特有の表現についても実際の論文の中で随時確認をした。

結果と課題

<池袋>

学部4年生1名、J8の学生4名というクラス構成であった。いずれの学生も、分からない点はすぐ質問し、お互いの発表は真剣に聞いてコメントするなど意欲的であった。一方で、就職活動、帰国、体調不良等、やむを得ない事情が大半ではあるものの、遅刻、欠席の多い学生が複数おり、クラスの進行に支障をきたすことがあった。休みなく出席していた学生は、各自で選んだ論文の読解や発表、レジュメ作成に、授業で学んだ技術を十分生かすことができていた。

今後の課題としては、学生自らが論文を選んで読み、発表するというような活動型授業の場合の欠席者への対応が挙げられる。少人数クラスだったため、複数の学生が欠席した場合には、多少の進度調整を行ったが、就職活動等で突発的に休まなければならない学生にとっては、予定表通りの進度とした方が、次の授業の準備はしやすかったかもしれない。また、各自に論文を選ばせる際、興味のある分野ではあったようだが、内容的にかなり難易度の高いものを選んでしまい、後々苦勞していた学生がいた。この点についても、本人の意見は尊重しつつ、適切なものを選べるよう指導したい。

<新座>

J8が2名、学部1年生(コミ福)が1名であったが、全員積極的に授業に参加し、スムーズに進んだ。特外2名は立教での所属は観光学部であったが、母国での専門とは異なるため、自分の本来の専門分野(言語学、社会学)で担当論文を選ぶことにした。異分野の論文を紹介しあうことで、分野による展開の違いや掲載誌によって文献や引用といったルールも異なることを確認でき、学生同志の学びあいがあったと思う。学部1年生からもこの授業で学んだ三部構成や各種ルールが、他授業のレポートを書く際の参考になった、という感想があがった。J8ということで、特外の学生と学部生が共に学ぶ貴重な機会になったようだ。

今後の課題としては、学生が選んできた論文が、内容的・言語的に本人のレベルに合わなかった場合の対応である。今回は本人の興味関心で選んだところ、結果として自分のレベルよりやさしい論文を選んだケースがあったため、最終発表では少し負荷を与えるようにした(例:翻訳の日仏比較のところ、母国の事例も追加してもらった)。最初に担当論文を選ぶ際、適当なものを複数用意し、教師とともに検討するとよいだろう。

<日本語論文作成法>

担当者名: 栗田奈美(池袋)、谷啓子(新座)

授業コマ数: 週1コマ

履修者数: (池袋)後期5名 (新座)後期1名

使用教材: 独自教材

目標

卒業論文や学術的な論文作成に必要とされる語彙・文型・スキルについて学び、高度な日本語論文作成能力を身につけることを目指す。日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らそれらを用いて構成の組み立てや短文作成などを行う。その後実際の論文作成を行い、実践力をつける。

授業の方法

まずは「論文とは何か」「論文の構成」「表現や用語」を扱い、同時に文献検索の方法を確認した。その上で各自の研究目的、研究課題、研究背景の検討に入り、並行して先行研究の収集と整理を行った。それぞれの研究テーマや先行研究に関しては、まとめたものを OHC を使用して発表し、フィードバックを行った。後半は、ふさわしい調査方法や必要となる根拠について検討した。その後、論文のアウトラインを作成・検討し、最終課題としては、論文の一部あるいは分析結果の発表を行い、作成した論文などを提出させた。

結果と課題

<池袋>

最後まで受講を継続した 3 名のうち、1 名が学部 3 年生、2 名が特外学生（帰国後、修士論文提出予定の大学院生）であった。3 年生は卒業論文が不要な学部所属しており、受講動機は小論文形式で出題される定期試験対策とのことであった。一方、特外の 2 名は修士論文の執筆を想定しているものの、研究の進捗状況には開きがあった。このように、ニーズがかなり異なっていたため、最終課題も、就職活動中だった 3 年生には企業研究を兼ねた SWOT 分析の結果を論文形式でまとめさせ、特外学生には修士論文の序論を提出させることにした。

授業内容もそれぞれに配慮したつもりではあるが、いずれのニーズも十分満たせたとはいえず、中途半端になってしまった感は否めない。受講目的が異なる学生への対応は、今後の課題としたい。

<新座>

今期は特外学生 1 名の履修であった。母国で学部 4 年次で、日本語での卒業論文執筆が必要であったため、それを目標に進めた。なお、この学生は前期に論文読解法を履修済みであったため、内容的に前期と重複する部分は省略し、その分を履修者の論文に必要な作業に振り分けて調節した。学期途中、帰国の機会があったため、それに合わせて論文の計画書を完成させ、母国の指導教授に報告・相談できるようにした。今回は文献調査中心の学部の卒業論文で、1 名を丁寧にみることはできたが、これが修士論文の学生をともに指導するような場合は、両者の学び合えるような工夫が必要であろう。

<キャリアジャパニーズA>

担当者名： <前期>高村めぐみ（池袋）、栗田奈美（新座）、<後期>高村めぐみ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 4 名，後期 2 名 （新座）前期 0 名

使用教材：独自教材

目標

日本での就職活動に必要な日本語やビジネスマナー、様々なスキルを学び、それが使えるようになることである。そのために、就職活動の際に必要なとされる日本語に関連する事柄を、大きく「作文スキル」「発話スキル」「ビジネスマナー」に分類し、それぞれについて実践的に学んでいく。

授業の方法

「作文スキル」「発話スキル」については、実際に自分で何度も書いたり話したりする活動を行い、それに対するフィードバックを受けることでスキルアップを目指した。具体的には、就職活動に必要な日本語に関連する様々な事柄—「エントリーシートの書き方」「自己 PR の仕方」「集団面接の受け方」「個人面接の受け方」などを実践的に授業で行った。また、服装や態度などのビジネス関連マナーについても学び、それを実際の就職活動に生かすことが出来るように授業を展開した。

さらに、前期・後期各 1 回ずつキャリアセンターの方を招き、就職活動の概要に関する説明を聞き、就職活動全体の流れを学んだ。

結果と課題

<前期>

新座は履修者がいなかったため、開講されなかった。

池袋は、履修者 8 名のうち 2 名が 4 年生であったため、就職活動と重なり、この二人は欠席が多かった。また、大学院生（1 年）も授業が忙しかったとのことで、期末テストは受けずに単位を取得せずに修了している。他の 5 名についてはモチベーションが非常に高く、課題を一つずつ丁寧にこなすことが出来た。自己分析などでクラスメートとディスカッションをする機会も多かったせいか、クラスメートと仲が良くなり、クラス内でのまとまりもあるやりやすいクラスだった。

<後期>

今学期は学部生がおらず、履修者が二人とも特別外国人留学生だった。そして、二人とも日本国内での就職を視野に入れてはいるが、母国での就職の可能性もあるとのことだったため、例年の「日本国内での就職活動」についてというよりは、社会人と学生の違いを考えたり、社会に出て必要となる基礎知識やマナーなどに重点を置いて授業を展開していった。授業開始前は、モチベーションをどのようにあげていくかを考えて授業を組み立てていく必要があるのではないかと考えていたが、二人とも非常に意

欲が高く、出席率もよく、与えた課題もすべてきちんとこなしていた。また、ゲストスピーカーの講義の際も、講師に積極的に質問をしたりしていた。今後も、学習者のニーズを見て、授業内容に幅を持たせた準備をしていきたいと考える。

<キャリアジャパニーズ B>

担当者名：小松満帆（池袋）、栗田奈美（新座）

授業コマ数：週1コマ

受講者数：（池袋）前期6名、後期3名 （新座）後期1名

使用教材：独自教材

目標

日本企業への就職を希望する者を対象に、日本独特の就職試験（主として国語分野）を突破するために必要な知識とスキルを身につけることを目標とする。就職試験に出題される国語分野、常識分野の問題を数多く解き、それらについての知識を身につけると同時に、試験対策を行う。

授業の方法

日本国内で実施されている就職試験の国語分野や常識分野において出題される試験問題について、カテゴリーごとにまとめ、その傾向と対策を学び、実際に多くの問題を解いていくことで、必要とされる知識を身につけさせた。それと同時に、日本国内で就職活動を行う際に知っておくべき情報（自己分析の方法やエントリーシートの書き方等）を提示することで、動機付けを図った。また、常識やマナー等についても紹介した。

結果と課題

（池袋・前期）

今学期は、日本での就職は考えておらず、日本語の知識を増やすために履修しているという学習者がほとんどだったため、いわゆる試験勉強のような膨大な知識内容についてこられるか心配であったが、熱心な学習者が多く、きちんと復習をしながら授業に臨んだため、大きな問題は見られなかった。また、1名の学習者が既に日本での就職活動を経験していたため、実体験を話してもらうなどして、より就職活動というものを身近に感じられるようなクラス展開ができた。その結果、日本での就職に興味を持った学習者もいたようである。

就職試験対策ということで、網羅しなければならない範囲がとても広く、学習者の負担が大きくなってしまふことが課題である。扱う項目と、学習者の許容量とのバランスを考え、学習者のニーズに合わせてクラスを展開していく必要がある。

(池袋・後期)

今期の受講者は、実際に就職活動をしている学習者、日本での就職をまだ決めていない学習者など、その目的意識に差異が見られた。そのため、就職試験に対する意欲にも温度差があり、授業に臨む姿勢に問題はなくとも、復習を含む自宅学習が足りず、なかなか正確に知識を身につけられない学習者もいた。3名という少ないクラスでもあり、学習者の持つ知識量にも差が合ったため、ときにはクラスの足並みが揃わず、授業運営が難しいこともあったが、積極的な発言や質問が多く、お互いに助け合う姿が多くみられた。

今後は、日本での就職活動への意欲、本コースを受講した目的などに違いのある学生に対し、それぞれにとっていかに有益な授業を展開していけるか、工夫が必要であると思われる。

(新座)

受講生は、まさに就職活動が進行中の学部4年生1名であった。そのため、苦手意識があるという漢字の問題も含め、熱心に課題に取り組んでおり、かなりの時間を学習に割いている様子がうかがえた。一方で、後半は会社説明会参加による欠席が続くこともあり、1回の課題を増やすなどして授業の進度を調整する必要があった。

今期は受講生が1名だったため、きめ細かい対応が可能であった反面、就職試験突破という同じ目標を持つクラスメートがおらず、その点では刺激に欠けたかもしれない。新座は比較的サイズの小さいクラスが多いため、こうした場合にも学生の学習意欲を保たせる工夫が必要であると思われる。

<ビジネス日本語口頭1>

担当者名：栗田奈美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：(池袋)前期16名、後期11名 (新座)前期5名

使用教材：独自教材

目標

ビジネスで必要とされる構文レベルの日本語力(聴解・発話)を身につける。

授業の方法

「依頼」「提案・申し出」「電話応対」「プレゼンテーション」等、ビジネスシーンに必要な会話力をつけるため、徹底した口頭練習を行った。まず、待遇表現を確認しながら基本的な談話練習をした上で、それを応用したロールプレイを行った。最終的には、学生自らが場面を設定し、会話を作成して発表し、教師がフィードバックする形式を取った。「電話応対」についてはオーラルテストを実施し、最終課題としては新商品のプレゼンテーションを課した。また、口頭練習と並行し、ビジネス日本語能力テスト形式の聴解練習及びビジネス語彙の導入を行った。

結果と課題

<前期>

(池袋)

学部3年生4名、4年生4名、大学院生3名、特外学生5名というバラエティに富んだ構成で、大変活気のあるクラス活動となった。日本語運用能力には開きがあったが、ニーズが明確なため、問題とはならなかった。受講生の中に日本企業で数年仕事をした経験を持ち、企業からの内定も既に受けている学生がおり、他の学生に大変いい刺激を与えてくれた。

(新座)

学部1年生1名、2年生1名、特外学生3名というクラス構成であった。女性が多く、全体的にややおとなしい印象ではあったが、練習には真面目に取り組んでいた。

(共通)

池袋、新座ともに同一の予定表に基づいて授業を進めたが、受講生数の違いにより、途中で進度に差がついてしまった。ただ、少人数クラスは個々の学生の発話や反応が確認しやすい一方、多人数クラスには他の学生の仕事やアルバイトの経験に基づく質問や意見を聞く機会が多いというメリットもあった。多人数クラスの課題としては、オーラルテストやプレゼンテーションの個別フィードバックの時間をいかに捻出するかという点である。

<後期>

(池袋)

学部1年生1名、2年生2名、4年生3名、大学院生1名、特外学生4名というクラス構成で、国籍も5か国にわたり、お互いに刺激を与え合うような活発なクラス活動となった。現時点では十分なビジネス知識を持たないものの、将来的に日本での就業を希望する学生や、帰国後に仕事を始める予定の学生もいたため、日本語だけでなく会話に付随するビジネスマナーに関する質問も多く見られた。

一方で、特に正規留学生には欠席が目立つ学生も複数おり、2週にわたってペアワーク、グループワークを行うような場合には、練習に支障をきたすこともあった。今後の課題としては、授業参加に対する動機づけが高まるような方法を検討したい。

<ビジネス日本語口頭2>

担当者名：栗田奈美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：(池袋)前期5名、後期5名 (新座)後期2名

使用教材：独自教材

目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

「アポイントメント」「交渉」「苦情処理」「プレゼンテーション」等、主に社外の相手と円滑なやり取りができるレベルを目指し、口頭練習を行った。ビジネス日本語口頭1クラス同様、談話練習とロールプレイが中心であったが、待遇表現のバリエーションも大幅に増え、かなりの長さを持つものを練習した。それぞれの単元が終わるごとに、学生自らが設定した場面におけるロールプレイテストを実施し、翌週録音したものをもとにフィードバックを行った。また、口頭練習と並行し、ビジネス日本語能力テスト形式の聴読解練習及びビジネス語彙の導入を行った。

結果と課題

<前期>

学部2年生1名、4年生2名、特外学生2名というクラス構成であった。受講生はいずれも既にレベル1を履修している学生だったため、クラス活動にもすぐに順応し、和やかに学習に取り組んでいた。今回初めて、かなり難易度の高いビジネスプレゼンテーションの課題を出したが、テーマの決まらない学生には個別カウンセリングの時間を取ったこともあり、予想以上の出来であった。今までは授業中に新しい会話を作らせる場合などに、ビジネス知識が少ないと難しいかと教師が判断し、会話モデルを少し改変しただけのものでも許容していたが、ある程度示唆を与えれば、かなりのレベルのものが作れることがわかった。今後は、そうした指導方法を取っていきたい。

<後期>

(池袋)

学部3年生1名、4年生2名、大学院生2名というクラス構成で、うち2名が就職活動中、1名が既に日本企業への就職が決まっている学生だったため、全般的に高い動機付けをもって学習していた。

一方で、就職活動中の学生は会社説明会参加による欠席や遅刻、早退が目立ち、クラス活動がやや滞ることもあった。ビジネス系クラスの受講生には就職を意識して履修する学生も多いため、特に後期開講のクラスには柔軟な対応が必要であると感じた。

(新座)

学部2年生1名、特外学生1名というクラス構成であった。勤怠状況もよく、池袋クラスに比べて落ち着いて学習に専念することができた反面、ビジネス日本語の使用が差し迫っていない分、学習態度はやや受動的であった。

今期もビジネス系ビデオを見せるなどして意識付けを図ったが、実際の使用をまだ想定していない受講生が集まった場合には、口頭練習にとどまらず、幅広い知識、情報を提示する工夫が必要だろう。

<ビジネス日本語（文書）>

担当者名：穴澤孝子（池袋），丸山千歌（新座）

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：（池袋）前期 6 名，後期 7 名 （新座）後期 2 名

使用教材：独自教材

目標

日本でのビジネスに必要な日本語能力（読解、作文）について学び、使えるようになる。

授業の方法

<前期・池袋>

まず、学生のレベル、敬語を含む日本語レベルがどのくらいかを探るために、いくつかのメール文章を書かせ、学生の足りない部分を把握した。授業内容は、実際に働いた経験がない学生のために、イメージしやすいメールの状況から入っていった。最初に、「大学の先生へのメール」を書いてもらい、メールのポイントを学んでいった。それと同時に、敬語表現や丁寧さについても考えていった。次に、「先生へのメール」のあと、いろいろな「ビジネスメール」を読みインプットを増やししながら、いままでのメールとの違いを比較していった。依頼やお礼などの「ビジネスメール」を実際に考え、課題とした。最後に、いろいろな「ビジネス文書」を読んでいった。ただ読むだけでなく、タスクを与えることでポイントを考えられるように工夫をした。主に、メールとの違い、社内や社外との違いなどを考えていった。依頼状を実際に作成し、課題とした。まとめとして、「先生へのメール」「ビジネスメール」「ビジネス文書」の課題を修正し再提出をしてもらった。授業最終回では、状況によって書く内容・形式が変化することの大切さを再確認した。授業全体を通して、ペアやグループで話し合い、課題を考えたり、間違いを修正したりする時間を多く与えた。

<後期>

「教師へのメール」「ビジネスメール」「ビジネス文書」を実際に作成しながら、場面や相手によって変化する語彙や表現、形式などを学び、丁寧さについても意識できるような授業を目指した。実際に働いた経験がない学生、フォーマルな日本語表現に慣れていない学生にも抵抗なく授業が受けられるように、タスクやグループディスカッション、発表などを多く取り入れ、飽きさせないような工夫もしていった。授業内課題や最終課題は、必ず内容を再度確認させ、フィードバックと再提出をさせることで、単なる文章や表現の暗記にとどまらず、実践力を付けることを最終目標とした。

結果と課題

<前期>

学年は1年生から4年生まで様々であった。お互いに知らない者同士、緊張した雰囲気の中で始まっ

たが、ペアやグループディスカッションをしていく中で、だんだん和やかな雰囲気になっていった。良い雰囲気であったため、出席率はよく、みな真面目に課題をこなしていったように思う。間違いを話し合い、なんども自力で修正していくことで、コースの目標を達成していくことができた。ただ、課題を忘れてしまったり、あまり考えずに文章を書いてしまったりする学生はミスがなかなか直らないこともあった。コースの全体像と成績については初めに説明をしたのだが、何度か確認をしていくことで、課題に対してより真剣に取り組む姿勢ができるのではないかと思う。

<後期>

(池袋)

コースの全体像、成績についてコースの初めに伝えてあったため、最後まで出席した学生は1つ1つの課題を丁寧に確実にこなしていったと思う。授業の中では、ペアやグループディスカッションをしながら課題内容を話し合い、なんども自力で修正していくことで、コースの目標を達成していくことができた。ただ、日本語能力が高い学生が多かったのもう少しタスクや課題を増やしてもよかったように思う。今後は、学期途中で学生の様子を見極めながら、授業内容を修正していきたい。また、企業での勤務経験がなく、ビジネス場面を想像しにくい学生のために、ビジュアル教材を取り入れるなどの工夫もしていきたい。

(新座)

受講生が2名と少数で、かつ日本語力が高く、授業態度も熱心であったので、中盤からペースを上げて、より多くのビジネスメール、ビジネス文書を扱うようにした。課題を多く学習し、かつ文書の適切さについてのディスカッションも深く行えたという点で、受講者にとって満足度の高い授業になったようである。

2012年度 日本語演習 授業記録

コース概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習1はJ2レベル、演習2はJ3レベル、演習3はJ4及びJ5レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習1では「アニメ／日本の歌」、演習2では「映画／まんが」、演習3では「小説／雑誌」について内容理解を目指す科目である。

演習1～3の詳細は以下の通りである。

<演習1>

担当者名：小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 6 名、後期 6 名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストで J2 および J2S にプレイスされた学生を対象とし、これまでに学習した日本語の語彙や文型を用いて行われる講義を理解し、日本のアニメ文化についての理解を深めることを目標とする。

授業の方法

J2 および J2S までに学習した語彙や文型を用いて、出来る限り日本語で講義を行った。その際、必要に応じて英語も使用した。日本のアニメの歴史と変遷を、日本社会の変遷と関連付けて扱った。毎回 1~2 つのアニメを取り上げ、それらの作品を通して、日本社会の変遷、現代日本の社会や文化、若者像、日本人の考え方について触れた。学生は、講義を聞いて、ディスカッションやプレゼンテーションという形式で、考えたことや自国との比較などを発表した。その際、出来る限り日本語を用い、必要に応じて英語を使うことも許可した。また、学期末には、「自国で人気のあるアニメについての考察」というテーマの最終レポートを課した。後期には、アニメだけでなく、アニメ主題歌の変遷についても触れた。

結果と課題

<前期>

テーマがアニメということで、アニメに興味のある学生が履修しており、そのため、熱心な学びの姿勢が見られた。アニメについて詳しい学習者もあり、それぞれの知識や考えを積極的に発言するという場面も多く見られた。しかし、クラスメートと考えをシェアしようという姿勢はあまり見られず、それぞれが興味のあることについて、個々に発言する、ということが多かった。今後は、クラス全体でテーマやトピックに取り組めるよう、また、アニメについてあまり知識のない学習者も参加しやすいよう、発言の場をコントロールする必要があるだろう。

授業中は、できるだけ日本語を使って進めたが、自分たちの持っている日本語力で、アカデミックな講義を聞き、意見を言うことができるという経験を得ることで、自分の日本語に自信が持てた様子であった。しかし、その一方で、J2、J2S のレベルの日本語力では一部を英語に頼らざるを得ないのも事実であり、英語が不得意な学習者には不利になってしまう恐れがある。極力媒介語に頼らず、彼らの日本語でできることを増やしていくというのが今後の課題である。

<後期>

後期も前期同様、アニメに興味を持ち、アニメに詳しい学習者が多く履修していたが、さらには、日本社会や日本の歴史にも詳しい学習者が複数名おり、そのため、発言や意見交換が活発に行われるクラ

スであった。クラスメート同士の関係も非常によく、穏やかで内容の濃いクラスとなった。

授業も前期と同様に、できるだけ日本語を使って進めたが、後期は学習者同士が助け合う場面が多く見られ、英語が不得意な学習者でも、クラスメートに助けられながら、問題なく理解を深めることができていた。授業内の発言においても、できる限り日本語で行おうとする姿勢が見られ、中には、中間プレゼンテーションを日本語で行った学習者もあり、積極的に自分たちも持てる日本語力を駆使しようとする場面が多かった。

ただアニメが見たい、アニメについて知りたい、というだけではなく、日本について理解を深めようとする学習者が多かったため、知り得た知識について深く掘り下げて考えようとする意識が高く、教師側も学ぶことが多かった。

<演習 2>

担当者名：高村めぐみ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：前期 2 名、後期 7 名

使用教材：独自教材

目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの映画やマンガを取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

<前期>

「家族」をテーマに授業を展開した。近代から現代にかけての日本の家族の様子が表れている映画やドラマのワンシーンを見たり、家族をテーマに描かれたマンガを読んだりしながら、感想や意見を述べ合った。その後、そのシーンから分かること、想像できることなどをディスカッションした。その際、自分の国との共通点や相違点を意識しながら議論が展開できるように授業を組み立てた。そして、自国および他国の「家族」に対する意識、形態の共通点や相違点に対する理解を深めた後、各自が家族をテーマにしたプレゼンテーションを行った。

<後期>

後期は、家庭問題からの発展として、「社会問題」もテーマに含めて授業を展開した。現在問題になっている日本・自国での社会問題について提起する映画やドラマのワンシーンを見たり、社会問題がテーマになっているマンガを読んだりしながら、感想や意見を述べ合った。その後、そのシーンから考えた

こと、現状、問題解決法などをディスカッションした。その際、自分の国との共通点や相違点を意識しながら議論が展開できるように授業を組み立てた。そして、自国および他国で起きている社会問題点に対する理解を深めた後、各自が社会問題をテーマにした質問をいくつか考え、日本人にインタビューを行った。その結果を「現代日本人の考え方の一例」として発表をした。

結果と課題

<前期>

途中まで非常に熱心な2名が出席していたため、様々なディスカッションがペアワークで行えたのだが、コース半ばで1名が病気で帰国をしてしまったため、学習者同士の活動が出来なくなってしまった。しかし、残った1名は最後まで真剣に取り組んでおり、無遅刻、無欠席で修了した。アメリカ人の学生だったが、教室内での発言、教師との議論では一切英語を使わず、全て日本語で通していたのも評価できる点である。

問題点としては、今学期のように熱心な少数の学生が履修しているときはまるで問題がないが、日本の文化や社会に興味がない、あるいは自国の文化・社会に詳しくない学生のみが参加した時、インプットの割合を多くするようなカリキュラムも考えなければならないと思う。

<後期>

アメリカ3名、イギリス1名、台湾1名、香港1名、タイ1名のクラスで、欧米系とアジア系がおおよそ半分ずつだった。そのため、ディスカッションでの情報交換では、自分には馴染みのない文化や歴史について、お互いに積極的に話し合いが行われていた。このクラスは文法や発音の正確さに重点を置いたクラスではないため、学生が話したいことを自由に話せる雰囲気になるよう運営を心がけた。こちらから日本語を積極的に直すようなことはしないでいたのだが、インタビューや発表の準備段階で、学生のほうから正確な日本語の指導を希望してきた。人数が少ないため、その時間も十分にとれ、結果的に日本語の4技能の向上にもつながったと思われる。

学期開始の履修登録締め切り後に、1名の学生から出席ができなくなったという申し出があったが、他の学生については全体的に遅刻、欠席も少なく、真面目に取り組んでいたと言って良いだろう。課題の提出率は非常によく、欠席して提出が遅れたときなども、教師からの催促なしに、全員が自ら提出をしてきていた。

<演習 3A (日本の小説、詩) / 演習 3B (日本の小説、詩) >

担当者名：高橋雅子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期12名、後期6名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<前期>

小説『キッチン』、詩、短歌、俳句・川柳を扱った。『キッチン』は場面ごとに担当を決め、毎回 1 名がレビューを行った。該当場面の心理描写・情景描写を取り上げ、ディスカッションを行った。また、映画化された DVD を鑑賞し小説との違いについて発表を行った。詩は宮沢賢治、高村光太郎、金子みすずを取り上げ、各自の解釈を発表し、音読を行った。短歌は「小倉百人一首」、与謝野晶子、俵万智などを取り上げた。また、学生に俳句・川柳を作成する課題を出し、発表させた。

<後期>

小説『舟を編む』、短歌、俳句、日本の詩人・小説家の紹介を扱った。『舟を編む』は場面ごとに担当を決め、毎回 1 名がレビューを行った。該当場面の心理描写・情景描写を取り上げ、ディスカッションを行った。短歌は「小倉百人一首」、与謝野晶子、俵万智などを取り上げた。俳句に関しては「お〜い、お茶・俳句大賞」のサイトから各自が気に入ったものを 1 つ選び、それについての発表をさせた。また、毎回の授業の最後に日本の詩人や小説家を簡単に紹介する時間を設けた。詩人は島崎藤村、谷川俊太郎、相田みつをを取り上げ、各自の解釈を発表し、詩の音読を行った。小説家は、夏目漱石、太宰治、村上春樹、吉本ばななを紹介した。

結果と課題

<前期>

文法や語彙を学ぶクラスではないので、遊びの時間だと捉えている学生や、他のクラスの履修の抽選に落ちたため仕方なくこのクラスを履修しているという学生が数名いた。そのためか、遅刻や無断欠席をしたり、課題を提出しない学生が少数ではあるが見られた。その一方で、日本の小説や文学が好きな学生も多数おり、ディスカッションで積極的に発言したり、授業で興味を持ったことを個人的に調べ、提出した学生もいた。

今後の課題として、初回の授業でクラスの目的や履修する心構えをしっかりと伝え、動機づけをきちんとしていきたい。

<後期>

日本の小説に興味がある、翻訳された日本の小説を読むのが趣味という学生が集まったクラスであった。履修人数がそれほど多くなかったため、小説のレビューで一人あたりの担当の量が多めになってし

まった。しかし、学生たちは毎回、きちんと内容を読み込んできていた。本の中には書かれていない登場人物の心情や背景などを考え、話し合う活動は毎回、活発に行われた。小説を読む楽しさを感じられた一方で、小説を通して日本社会や日本人の価値観、日本語独特の表現にあまり触れられなかったのも、それについては今後の課題としたい。

2012年度 日本語中級 授業記録

<日本語中級A>

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週1コマ

受講者数：前期7名

使用教材：独自教材

目標

J4からJ6の学生を対象とし、学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

授業は、読解活動を中心とするが、読解そのものは、内容的には同じで、しかし各学生のレベルに合わせたものを用意し、授業外の活動として進め、授業内では課題である読解教材についてのグループディスカッションによる内容確認や、全体ディスカッションを中心として展開した。

また、読解で扱ったテーマに関する作文の課題を2回出し、各課題は提出後のコメントを生かしてリライトして完成させるようにした。また毎回の授業に参加したTAは、課題のフィードバックを行ったり、ディスカッションメンバーに加わるなど、積極的に授業活動に関わるような工夫をした。

結果と課題

受講生は、特別外国人学生5名と大学院生2名である。異レベル合同の科目は本センターでは初めての試みであったが、他の日本語科目のスタイルと異なる授業スタイルに関心をもった学生が受講したようで、全員、授業外の課題にも授業内の活動にも、積極的にかかわり、それぞれに成果を上げたように観察された。受講生は新座キャンパス近くの寮に住んでいる学生が多く、新座でこの科目を受講してから池袋キャンパスに移動するというスタイルをとっていた。新座キャンパスの日本語科目として新たな可能性を感じた。

<日本語中級B>

担当者名：谷 啓子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 4 名

使用教材：独自教材

目標

J4 から J6 の学生を対象とし、学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

NHK「クローズアップ現代」VTR を素材に「①若者の消費」「②未婚化」「③育メン」「④老後の住まい」の4つの側面から日本社会を考えた。各テーマの流れは、VTR に出てくる語彙シート配布（意味調べは次回までの宿題とする）→授業での語彙シートの確認とそれらを使った短文作りと発表→テーマに関わるウォームアップワーク→VTR 視聴→内容確認→ディスカッションとした。テーマ1と3については、ディスカッション後に作文を課し、翌々週までに提出、チェックを受けて修正、再提出とした。作文については毎回「図表の表現」や「主張の表現」といった回ごとのターゲット表現を決め、それらを使って書くことを課した（字数はレベル別に設定）。

最終課題としては、扱った4テーマのうち最も興味を持ったものについて、より深く調べたり自国と比較したりして口頭プレゼンテーションを行った。

結果と課題

4名の内訳はJ4が1名、J6が3名であった。J4の学生が非漢字圏であったこともあり、語彙の確認には他3名よりフォローが必要になったため、その際にはティーチング・アシスタントがつくようにした。履修者全員、各課題に積極的に取り組み、ディスカッションについてもよく意見が出ていた。今期初開講のクラスであったが、現代日本社会を扱ったVTRが参加者の興味関心に合っており、概ね当初の予定通り進んだと思う。

今後の課題としては、履修者のレベルに大きな開きがあった場合の対応（今回は1名だったので、丁寧にフォローできた）と、全体スケジュールであろう。半期4テーマを扱うと、2回の作文のフィードバックの時間が十分にはとれない。最終課題の準備時間についても、もう1回増やすことで、リハーサルチェックができることから、次期検討が必要だと思われる。

<日本語中級C>

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 10 名

使用教材：独自教材

目標

J4からJ6の学生を対象とし、学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

授業は、読解活動を中心とするが、読解そのものは、内容的には同じで、しかし各学生のレベルに合わせたものを用意し、授業外の活動として進め、授業内では課題である読解教材についてのグループディスカッションによる内容確認や、全体ディスカッションを中心として展開した。また、読解で扱ったテーマに関する作文の課題を2回出し、各課題は提出後のコメントを生かしてリライトして完成させるようにした。また毎回の授業に参加したTAは、課題のフィードバックを行ったり、ディスカッションメンバーに加わるなど、積極的に授業活動に関わるような工夫をした。

結果と課題

受講生は、特別外国人学生 10 名である。先学期につづき異レベル合同の科目は今年度が初めての試みであったが、他の日本語科目のスタイルと異なる授業スタイルに関心をもった学生が受講したようで、全員、授業外の課題にも授業内の活動にも、積極的にかかわり、それぞれに成果を上げたように観察された。「観光」「祭り」「江戸」の3つのトピックを扱ったが、それぞれの回の分担読解の活動を学生たちが楽しめ、またそこで力をつけたように思う。各学生の個性が表れる発信も見られた。

<日本語中級D>

担当者名：谷 啓子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：前期 7 名

使用教材：独自教材

目標

J4からJ6の学生を対象とし、学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

年中行事を中心に、日本の四季について扱った。自ら調べ、口頭発表やディスカッション、レポートなど様々な方法で表現することで4技能をバランスよく使うよう計画した。映像素材として、NHKのVTR「しばわんこ和の心」を部分的に使用した。オリエンテーションでは旧暦の説明や日本の時代区分、

日本地理について確認し、今後の比較のために履修者の国の季節について説明してもらった。その後は「冬」「春」「夏」「秋」のテーマ順に進めた。

各テーマは2～4回から成り、ことば調べの宿題→宿題の発表→VTRで確認→グループディスカッション（録音してフィードバック）→小課題（ミニレポートまたは発表）の流れである。ことば調べは、季節や年中行事に関する語彙（例：鳥居）を1～2語担当し、画像などの視覚資料を用意してOHCで見せながらクラスメートに説明した。

グループディスカッションは、3～4人に1人、教師またはティーチング・アシスタントがつく小さな単位で行った。各テーマについて用意されたディスカッションポイントについて話し、それを録音したものをグループ内で聞き直した。その際、発話者には発話の意図を説明してもらい、教師やティーチング・アシスタントがより適切な表現をアドバイスしたり、皆で考えたりした。

小課題は各テーマに添った内容で、ミニレポートは翌々週提出、発表は翌週とした。この小課題には回ごとにターゲットとなる表現（例：図表の説明や引用表現など）を使うよう指示した。最終課題は後期扱った内容から個々にテーマを見つけ、10分程度のプレゼンテーションを行った。

なお、この授業は評価の25%は授業外で学生が自主的に行うWebラーニングでつけられる。それぞれの学生は授業外の時間に、自分のレベルに合った文法・語彙学習をWebで行い、進度は日本語教育センターで管理した。授業の13回目にまとめのテストを行った。

結果と課題

履修者間にレベル差はあったが、日本の四季や年中行事というテーマは、短期間しか滞在しない特外の学生たちにとって興味深かったようで、積極的に参加していた。内容的に日本文化の伝統的な側面が続くことになったので、時折現代的な要素も取り入れた（例：夏で「お中元」「浴衣」をデータで読む／梅雨に関するオノマトペクイズ）。

以下、主要な活動について課題をまとめる。

・ことば調べについて：

当初、発表者の専門用語が多く、聞いている側が理解できない場面が見られたため、2回目以降は発表をより簡潔にすること、難しい語彙については別途意味を説明する指示をしたところ改善された。この活動は、自分が担当した用語について「他のメンバーが分かるように」「視覚資料を用意して」と指示したところ、それぞれに工夫して準備してくれた。説明が上手な人を参考に、回を追ってメンバーの説明が上達していくのが見てとれた。

語彙リストは内容的に名詞が多かったが、どの年中行事の説明にも「供える」「祀る」等、学生にとってあまりなじみのない動詞が出てくるので、これらについては早い時期にリスト化して渡す工夫をした。

・ディスカッションについて：

メンバーは毎回入れ替えをした。グループ内にレベル差はあったが、他メンバーの発話を聞くことで学び合いができていたと思う。各テーマ前半のことば調べとVTRで日本のことを学ぶのが中心となる

が、ディスカッションでは自分の考えや、母国のことを教師はじめ他のメンバーに説明する機会が多く、充実感が得られたようだ。録音して行うことに当初緊張気味であったが、自分の発話をその場で聞き直してよりよい表現に修正できるのが参考になるようで、熱心にメモをとる姿が見られた。

今回、履修者が7名を4名・3名の2グループに分けたが、録音→フィードバックというこの方法には適切な人数だった。全体で10名以上になると音声の拾い具合や1人あたりのフィードバックの時間等が厳しくなるため、やり方に工夫が必要だと思われる。

・課題について：

テーマごとの小課題は、毎回ターゲットとなる表現（例：引用）を用意した。説明用の資料の難易度を調整するようにしたが、J4の人にとっては、そのインプットや練習が時間的に十分とはいえない面があった。赤入れしてフィードバックを行ったが、同時に日本語相談室の利用もすすめた。

2012年度 日本語基礎<Academic Japanese >/日本語 授業記録

コース概要

日本語基礎<Academic Japanese >/日本語は、学部の正規留学生を対象としたコースであり、第二外国語として日本語を選択した留学生のみが受講する科目である。主に大学で必要とされるレポート作成、プレゼンテーションのスキル獲得を目指し、全体でゼロからレポートを作り上げ、最終回にはレポートを基にしたプレゼンテーションを実施する。レポート・プレゼンテーション作成のプロセスの中で必要な項目に触れ、練習・活動を展開することでスキルを獲得していく。

前期の日本語基礎1では、文章表現、構成に関する基礎的な項目を学び、後期の日本語基礎2では、前期の内容を踏まえてさらに高度なスキルを学ぶ。詳細な内容は以下に示す通りである。

日本語基礎1<Academic Japanese 基礎>/日本語1

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。具体的には大学での授業参加に必要なスキル、わかりやすく話すためのスキル、レポート形式、機能別文型などについて学ぶ。

授業の方法

前半は大学でのレポート作成をめざし、レポートとは何か、テーマの絞り込み、マッピング、構成の作り方、文献検索の方法、引用のしかた、図表提示の仕方、文章の要約、文章表現やねじれ文、読点の使い方などを扱った。同時にミニスピーチを取り入れ、わかりやすく話すスキルを学んだ。

後半は、出来上がったレポートの添削を学生同士と教師で繰り返し、完成度の高いレポートを作成した。またレポートの内容を基にパワーポイントを使用してプレゼンテーションができるように進めた。授業最終回では、プレゼンテーション、レポート作成に関する活動をふり返り、互いに半期の学びを確認した。尚、テーマは、「外国人に関すること」（文学・法学クラス、社会・経営クラス、心・福祉クラ

ス、観光・映像クラス)、「環境問題に関すること」(理・経済クラス)に設定した。

[文学・法学部]

担当者名：長田紀子 / 高橋雅子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：7 名

使用教材：独自教材

結果と課題

アカデミックなレポートをルールに沿って書く、聞き手が理解しやすいような発表をする等について、今まで学んだことがなかった学生がほとんどであった。学生にとってはクラスで扱うことが新鮮であり、大学生活において必要だと感じていたようで、熱心に授業・課題に取り組んでいた。

最終回のクラスで、「他のクラスでレポートの書き方を褒められた」などの報告や、「大学の授業参加に非常に役立つ内容だった」という感想が多く寄せられた。レポート作成やプレゼンテーション、メモの取り方など、このクラスで学んだことを早速他の授業で応用でき、「役立つ」という実感ももてる授業展開になったと思う。また異なる国から集まった学生達でディスカッションをすることにより様々な考え方があり、レポートでは客観性が必要であること、興味のないテーマでも調べてみると大事なことに気づくなど、新たな学びもたくさんあった。日本語の文の書き方なども、もう十分できていると思っていたが改めて自分の足りないところに気づき、「もっと学びたい」という意欲につながるということもあった。

また、前期のレポートは、引用の仕方がまだ効果的にできていない学生もいたので、後期ではその点に気を付けながら指導していきたい。

[社会・経営学部]

担当者名：清水澤子 / 小島佳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：8 名

使用教材：独自教材

結果と課題

学生は、この授業を受けるまでは、作文としての文章の書き方や口頭発表の仕方は学んできたが、大学で要求される学術的なレポートやプレゼンテーションについては、ほとんど知らない学生が多かった。そのため初めは、レポートとは何かをあまり理解していなかったが、本授業でレポートの目的や意見文/事実文の書き分け、引用・図表説明の仕方などを学ぶうちに、主張や論拠の大切さを理解し、論理的なレポートを意識して書こうとするようになった。同様にプレゼンテーションではミニスピーチでの資料

説明練習などを通して、構成を考えたりわかりやすい発表を目指すようになった。

今期は、学んだことを十分に理解しレポートやプレゼンテーションで発揮できた学生も多かったものの、学期の最後になってレポートに求められていることをやっと理解した学生もあり、学生間で理解とその応用に大きく差がでた。また、課題に取り組む姿勢にも学生間で大きな差があったため、相互に活発な意見交換がなかなか起こりにくかった。

そのため、後期は、意識差がある学生間でも発言しやすい環境を整え、それぞれの学生に合わせた到達目標を想定して、各自のレベルで力が伸ばせるよう指導していければと考えている。

[観光・映像学部]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：5 名

使用教材：独自教材

結果と課題

レポート、プレゼンテーションを全く経験したことのない学生もある学生も、毎回の授業の課題をこなしていった結果、どのように課題を仕上げるかを詳しく学んでいった。また、どのようにすれば自分の考えをより分かりやすく説得力を持って表現できるかを理解し、具体的に学んでいったと思う。同じテーマであってもレポートとプレゼンテーションでは伝え方が変わってくることに気づき、工夫と努力が見られた。

会話力で勝る韓国人学生、文字表現の得意な中国人学生という図式でスタートしたが、プレゼンテーション時には、プレゼンターと聞き手という両方の役割を体験し、意見・主張を効果的に聞き手に伝えることの大切さが実感できたようである。また、レポート作成時には輪読で互いの長所・短所に気づく中で、学び合う仲間意識が育っていった。そのことが最後まで意欲を持って課題に取り組む力になったように思う。後期は前期に学んだことや反省点を生かし、レベルアップを図っていきたい。

[心理・福祉学部]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：4 名

使用教材：独自教材

結果と課題

レポート、プレゼンテーションを全く経験したことのない学生もある学生も、毎回の授業の課題をこなしていった結果、どのように課題を仕上げるかを詳しく学んでいった。また、どのようにすれば自分の考えをより分かりやすく説得力を持って表現できるかを理解し、具体的に学んでいったと思う。同じ

テーマであってもレポートとプレゼンテーションでは伝え方が変わってくることにも気づき、工夫と努力が見られた。

コミュニティ福祉学部3名、心理学科1名（韓国人学生3名、中国人学生1名）で、互いの異質性を意識した感じでスタートしたクラスだったが、プレゼンテーションの授業においては聞き手の立場から見てどのような構成、話し方がよく理解出来るかという点を中心に率直に意見交換をした。また、レポートの輪読を通じて学び合い認め合う仲間意識が育っていった。テーマに関連する資料を紹介し合ったり、アドバイスをし合ったりする姿も見られた。ただ、一部の学生から読解スピードが遅いことや限られた時間の中での主張のまとめ方に関する悩みも聞かれたので、後期にはその点に気を付けながら、レベルアップが図れるよう進めていきたい。

日本語基礎2 <Academic Japanese 基礎>/日本語2

目標

日本語1で学んだ基本的スキルを定着させるとともにその応用を目指す。具体的には、日本語1よりさらに実践的なスキルを身に付けるため、プレゼンテーションスキル、資料検索の方法、テーマからレポートのまとめ方について学ぶ。

授業の方法

前半は日本語基礎1で扱ったレポート作成の内容をもとに、要約、引用、図表解説などの復習をすると共に、対比と比較、列挙、同意と反対、変化の形容、課題・帰結の提示などを取り上げ、より論理的で正確な表現ができるようにした。また、分かり易く話すためのスキルとして、時事問題に関するミニスピーチ、パワーポイントを使った図表の説明を実施した。

後半は、レポートのアウトライン、序論、本論の一部をその都度発表し合い、構成や論旨の見直しを繰り返すことで、完成度の高いレポートが作成できるようにした。口頭発表の授業においては、レポートの内容を基にパワーポイントを使用してプレゼンテーションを行った。前期より分かり易いプレゼンテーションを目指すために、図解の仕方、発表の構成、口頭能力スキルを学んだ。なお、後期のレポートテーマは自由とした。

[文学・法学部]

担当者名：長田紀子 / 高橋雅子

授業コマ数：週2コマ

受講者数：10名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期に引き続き、全員、出席率がよく、課題にもまじめに取り組んでいた。前期の課題であった、レ

ポートにおける参考文献の引用についても、ルールに則って引用が出来るようになっていた。自分のレポートの構成や主張の展開について、何度も見直して深く考える学生と、適当に切り上げてしまう学生が見られた。また、レポートや発表におけるピア活動が苦手な学生もいた。それぞれの活動の目的や意義をきちんと説明し、動機づけをする必要性があると感じた。

最後の授業で振り返りを行ったが、全員が「レポートの書き方やプレゼンの仕方などで能力が向上した」など、今後の学生生活に役立つととらえており、前期、後期を通して実りの多い授業展開になったと思う。教師の目から見ても学生の成長が感じられた。今後は基本的には今までのシラバスに沿って進めつつ、上記のように、より細かく丁寧に対応していく工夫が求められていると言える。

[社会・経営学部]

担当者名：清水澤子 / 小島佳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：8 名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期に学んだ、明確な論拠に基づいた主張のあるレポート作成を自分の興味のあるテーマで行うことが後期の授業での目的であった。前期はある程度手ごたえを得た学生と、大学で要求されるレポートについて十分理解したとはいえ不完全燃焼の感のあった学生、更には欠席が多く結局レポートもプレゼンも完成させられなかった学生がいた。今期このクラスは非常に特殊な状況に落ちいり、8名の登録学生のうちレポート作成・プレゼンテーション実施まで行えたのは半分の4名だった。他の4名は10月から欠席が続き、指導がほとんど行えなかった。欠席理由は不明だが、国際センターや他学生の話から、本人の意思で履修をやめたと思われる。

このようにクラスサイズとしては半分になり、ややさびしい感は否めなかったが、参加していた4名は前期と比べても積極的に課題に取り組み、レポートの目的設定・資料の集め方・文章構成力・プレゼンでの伝え方においても非常な向上を見せた。前期に今一つレポートとは何かがつかめなかった学生も今期は自分なりに努力し、達成感を得たようである。

様々な状況の学生が集まるとはいえ、それぞれの学生に合った指導ができればと思っている。

[観光・映像学部]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：6 名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期で学んだレポート作成とプレゼンテーションの方法をふまえ、各自が興味のあるテーマを自由に選び、再度、課題に取り組んだ。前期で不十分だった点の反省を活かし、全体的には余裕を持って作業を進められたと思う。

しかし、レポート作成においては、前期や後期前半で学んだ表現をしっかりとレポートに取り入れ、まとまりのある正確な文章を書けるようになった学生がいる一方で、自分流の書き方をなかなか改められない学生もいた。各表現を使った作文練習では、どの学生もポイントを押さえ、完成度の高い文章が書けるので、今後は毎回の授業で学んだことを各自のレポートにどのように上手く反映させていくかということが課題である。

口頭表現においても学んだことを一つずつ身に着けながら最終プレゼンテーションにつないでいった学生がいる一方で、理解はしたものの実践に至っていない学生も散見された。学生の興味関心を喚起しつつ、自ら練習する態度を養う指導上の工夫がさらに必要であろう。

[心理・福祉学部]

担当者名：山辺真理子 / 川端芳子

授業コマ数：週 2 コマ

受講者数：4 名

使用教材：独自教材

結果と課題

前期で学んだレポート作成とプレゼンテーションの方法をふまえ、各自が興味のあるテーマを自由に選び、再度、課題に取り組んだ。前期で不十分だった点の反省を活かし、全体的には余裕を持って作業を進められたと思う。

しかし、レポート作成においては、課題の取り組み方に差があり、自分の選んだテーマに興味を持ち続け、資料収集や内容の修正に熱心に取り組む学生とそうではない学生がいた。テーマの決定から完成まで、いかに学生のモチベーションを維持し、作成作業のサポートをしていくかが課題として残った。

口頭表現においても時事問題等の小さなプレゼンテーションは何とかこなしても、レポートの内容と重なる最終プレゼンテーションの構成段階で躓き、途中で放棄した学生がいたことは残念であった。日本語の授業に留まらず大学の授業に出席しない学生への対応は課題である。

1. Placement Test 実施報告

【前期】

前期 プレイACEMENTテスト実施日

1. 新規（筆記テスト）： 2012年4月5日（水）
2. 新規（面接）： 2012年4月6日（木）
3. 継続（筆記テスト）： 2012年4月3日（火）
4. 特別措置： 2012年4月9日（月）、12日（木）、16日（月）

2012年度前期		新規（人）		継続（人）	
		特外	正規院生	特外	正規院生
プレイACEMENTテスト受験辞退		0		4	
プレイACEMENTテスト①		11	1	2	1
プレイACEMENTテスト②	受験	40	22	56	1
	受験不要*			5	0
受験者合計		51	23	63	2
日本語科目履修者		44	17	58	2

*受験不要：すでに全カテゴリーでJ8レベルに達しているため

前期プレイACEMENTテスト結果（人）

J0	8			
J1	8			
J1S	3			
J2	7			
J2S	4			
J3	3			
J3S	3			
	文法・句型	読解	作文	聴解・会話
J4	10	13	12	12

J 5	29	17	33	24
J 6	22	12	31	24
J 7	20	21	14	20
J 8	10			

*緑の網掛けクラスは定員オーバー

<前期総評>

特に中級（J 5 文法・文型、J 5 作文、J 5 聴解・会話、J 6 作文）で大幅に定員を超過したため、臨時増コマを行い、2セクション体制で授業を展開した。J 6 の聴解・会話については定員オーバーのまま授業活動の方法を変えて展開することにした。

増コマ分は、教育講師の「日本語相談室」の開室時間を減らしてこれに充てることで対応したが、授業外サポート部分のサービス低下についての課題が生じた。

ここ数年の留学生増加とともに、特に中級および J 0 レベルで定員を超過する傾向が確認されたため、前期のプレイスメントテストの結果を受けて、2013 年度以降のコマ展開について検討することにした。

【後期】

後期 プレイスメントテスト実施日

1. 新規（筆記テスト）： 2012 年 9 月 10 日（月）
2. 新規（面接）： 2012 年 9 月 11 日（火）
3. 継続（筆記テスト）： 2012 年 9 月 12 日（水）
4. 特別措置： 2012 年 9 月 21 日（金）

2012 年後期		新規 (人)		継続 (人)	
		特外	正規院生	特外	正規院生
プレイスメントテスト受験辞退		3		5	
プレイスメントテスト①		19	0	0	1
プレイスメントテスト ②	受験	67	1	24	2
	受験不要*			2	20
受験者合計		86	1	26	23
日本語科目履修者		79	0	22	11

* 受験不要：すでに全カテゴリーで J 8 レベルに達しているため

後期プレイズメントテスト結果 (人)

J 0	16			
J 1	8			
J 1 S	6			
J 2	6			
J 2 S	4			
J 3	4			
J 3 S	4			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J 4	8	5	9	6
J 5	14	12	13	14
J 6	18	12	27	17
J 7	16	16	15	22
J 8	3			

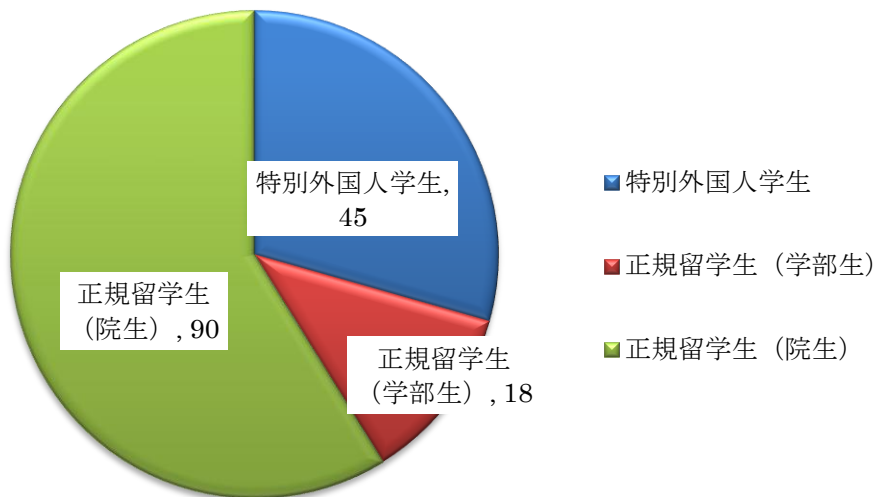
<後期総評>

総長室の了承を得て、後期については、過去のデータにもとづき、あらかじめ中級（J 5、J 6、J 7の聴解・会話、およびJ 6作文）4科目について2セクション体制を用意して臨んだ。事前に2セクション体制を組んだことにより、担当教員の手配ができたので、「日本語相談室」の開室時間に影響を及ぼすことなく対応できた。

3 2012年度 日本語相談室実施報告

2012年度 日本語相談室利用状況（2012年4月11日～2月4日）

【相談者所属別利用件数】



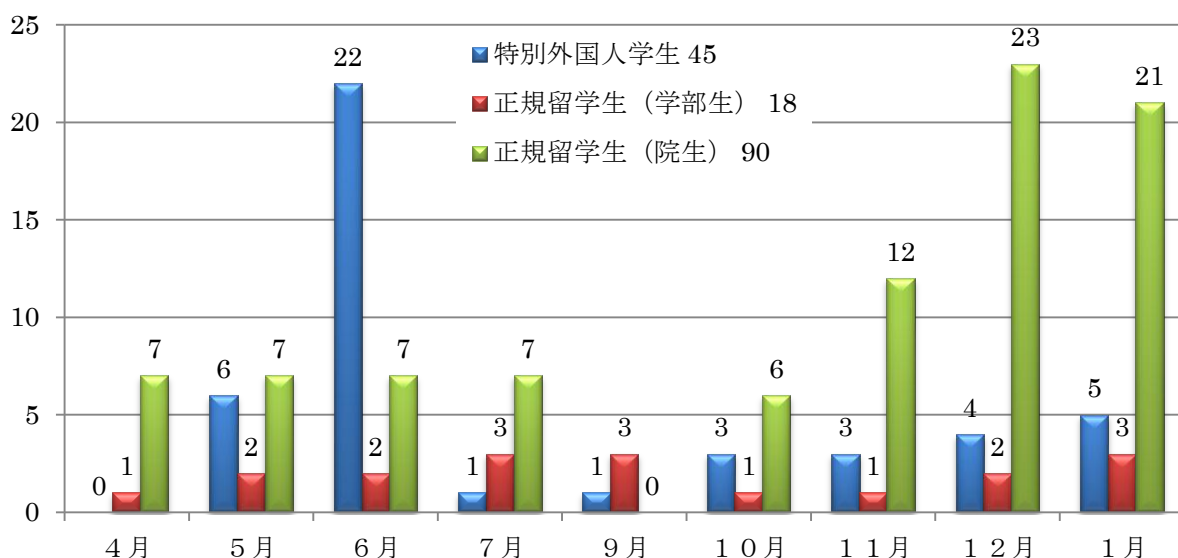
日本語相談室の利用状況は、相談者の所属別で見ると、昨年度と同様に正規大学院留学生の利用がもっとも多い。正規大学院生は、通常日本語科目を履修しないが、ゼミ発表、修士論文など日本語による発信活動が、研究活動の重要な部分を占めており、このニーズの高さが相談件数につながっていると考えられる。

また、今年度は、日本語教育センターで初めての留学生のための日本語スピーチコンテストを開催した年でもあった。特外生の相談件数が多かったことや、相談時期が特に6月に多かったことは、スピーチコンテストとの関連が大きい。スピーチコンテストなどのセンター企画をきっかけとして、授業外の日本語学習サポートを周知し、また利用を広げていくという、今後の展開への一つの示唆となった。

正規学部留学生の相談件数は、3つの所属の中でもっとも少ない。全学共通カリキュラムの日本語科目履修者が少なくなっている中で、授業外での周知の方法が求められていると言えよう。今後は、ホームページ、ニュースレターなどを活用し、周知を徹底していきたい。

【月別推移】（人）

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
特別外国人学生	0	6	22	1	1	3	3	4	5	45
正規留学生(学部生)	1	2	2	3	3	1	1	2	3	18
正規留学生(院生)	7	7	7	7	0	6	12	23	21	90
月別合計	8	15	31	11	4	10	16	29	29	153



月別推移で見ると、前述のとおり、特別外国人学生はスピーチコンテスト開催月の利用がもっとも多く、大学院留学生については修士論文の提出時期に向けて利用件数が増える傾向が見られた。今年度前期は、臨時増コマの必要から、日本語相談室展開コマの一部（4 コマ）を日本語授業コマに充てたため、前期の利用数が昨年度よりも少なくなるという結果を生んでしまった。しかし、後期以降は、日本語相談室を日本語授業に転用せずすむ体制が整ったので、今後はこのようなケースは生じないと思われる。

【学部・研究科別 相談キャンパス別／利用者実数・利用件数】

学部・研究科別の利用状況を見ると、学部生は文学部、社会学部、大学院生は文学研究科、社会学研究科、異文化コミュニケーション研究科の利用が多い。実質利用人数と合計利用回数を併せてみるとリピーターがどの程度いるかが把握できるが、特に大学院生が繰り返し日本語相談室を利用している傾向があることがわかる。来年度以降、広報活動を活発に行い、多くの留学生が本サービスを楽しむよう、利用を促していきたい。

		実質 利用人数	合計 利用回数	相談キャンパス	
				池袋	新座
特別外国人学生		28	45	39	(*1)6
正規留学生 学部生	文学部	5	12	11	(*2)1
	社会学部	2	3	3	
	法学部	1	1	1	
	経営学部	1	1	1	
	異文化コミュニケーション学部	1	1	1	
正規留学生 院 生	キリスト教学研究科	1	21	21	
	文学研究科	4	16	15	(*2)1
	経済学研究科	1	6	6	
	社会学研究科	4	16	16	
	ビジネスデザイン研究科	1	4	1	(*2)3
	21世紀社会デザイン研究科	2	6	6	
	異文化コミュニケーション研究科	3	14	14	
	観光学研究科	1	1		1
	現代心理学研究科	1	6	5	1
特別外国人学生 計	28	45	39	6	
正規留学生学部生 計	10	18	17	1	
正規留学生院生 計	18	90	84	6	
合 計		56	153	140	13

(*1) 計6件はすべてスピーチコンテスト原稿のチェック。うち3件は池袋キャンパスでの予約が取れず、テレプレゼンスの時間帯を利用して池袋キャンパスで相談した。

(*2) 計5件は、いずれも池袋キャンパスでの予約が取れず、4件は新座キャンパスにて相談。1件はテレプレゼンスの時間帯を利用して、池袋キャンパスで相談した。

池袋、新座の各キャンパスに所属する学生の利用状況を見ると、新座キャンパスにある3学部の学部生は、今年度は利用がなく、3研究科の大学院生は新座と池袋の両方の日本語相談室を利用しており、全体的には池袋キャンパスの日本語相談室の利用件数のほうがやや多い。

池袋、新座の各キャンパスで展開している日本語相談室の利用状況で見ると、池袋キャンパスでの利用が圧倒的に多い。新座キャンパスでの日本語相談室の利用が、池袋キャンパスでの予約がとれないか

ら、というケースが合計5件あった。今年度実施した日本語相談室を利用しない学生に対するアンケート調査の結果も参考にしながら、ひきつづき、新座キャンパス所属の学生にとって利用しやすい体制を探っていきたい。

【曜日・時限別 利用件数】

前期は臨時増コマの必要から、日本語相談室展開コマの一部（4 コマ）を日本語授業コマに充てたため、日本語相談室の開室時間の実績が計画よりも少ない。日本語相談室の曜日、時間別利用件数を見ると、前後期ともに新座キャンパスでの利用件数が少ない。

相談内容としては、卒業論文、修士論文、博士論文と、レポートに関する相談が最も多く、その次が奨学金申請書類の添削となっている。

日本語相談室窓口寄せられた学生からの意見としては、前期の開室時間の少なさへの指摘のほか、学生のスケジュールと日本語相談室の開室時間がうまく合わないという内容のほか、2 コマ同時に予約したいという予約体制についての希望があった。

2012 年度前期

(池袋キャンパス)

	月	火	水	木	金
2 限	10				10
3 限	6				16
4 限	16				

(新座キャンパス)

月	火
	2
*3	2

*3 件はテレプレゼンスの時間帯を利用して、池袋キャンパスで実施

2012 年度後期

12 月～教育講師 1 名の休暇取得のため、教育講師の担当枠（月 4 限、水 3 限、水 4 限）を専任教員が（月 4 限、水 4 限、木 3 限）担当。

(池袋キャンパス)

	月	火	水	木	金
2 限	6				10
3 限	11		4	7	12
4 限	3		19		10

(新座キャンパス)

月	火	水
	3	*1
0	2	

*1 件はテレプレゼンスの時間帯を利用して、池袋キャンパスで実施

2012年度 日本語相談室相談内容内訳 (件)

相談内容	前期	後期	計
卒業・修士・博士論文	3	45	48
レポート添削（授業、ゼミ等）	22	24	46
スピーチコンテスト添削指導	26	0	26
奨学金申請書類添削	3	11	14
発表指導（授業、ゼミ等）	1	4	5
就職活動のエントリーシート添削	2	2	4
学習方法指導	3	1	4
メール添削	3	0	3
日本語能力試験対策指導	1	1	2
その他	1	0	1
キャンセル	3	1	4
合計（除くキャンセル）	65	88	153

日本語相談室担当者コメント

<池袋>

特外の学生の利用はあまりなく、大学院生、学部生の利用が多かった。特に後期の学期末に期末レポートや修士論文に関する相談予約が集中し、池袋の相談室（テレプレ除く）は、開室時間に予約で埋まる日も多かった。

主な相談内容は、スピーチコンテストの原稿、発表のレジюме、奨学金申請書の添削、期末レポート、修士論文等の日本語の添削であった。その他には、日本語学習の方法に関する相談もあった。長文のレポートや修士論文についての相談では、一度に持ちこまれるページ数が非常に多く、ときには相談時間の直前に提出される場合もあったため、相談時間までに添削が間に合わない、あるいは、相談時間内に指導が終わらないということもたびたび起こった。また、前もって論文を預けた学生の方は、相談時間の前にあらかじめ添削をしておいたが、結局相談当日に改訂版の原稿を直してほしいという依頼もあり、有効に時間を使えないことも複数回あった。基本的には、どの学生も熱心にこちらのアドバイスを聞き積極的に指導を受けていた。学生の利益を優先するためにも、今後は相談室利用のルールを確立し、より明確に学生に提示していくことが必要であると思われる。

<池袋テレプレゼンス>

テレプレゼンスの利用は1回のみだった。ただし、池袋キャンパスの相談室の時間に予約が取れないが緊急性があるため、数回ではあるがテレプレゼンスの時間に対面式の相談を行ったことがあった。テレプレの予約がない日は、相談室の予約状況に合わせて、もっと有効に使うことが出来るようにすることが今後の課題である。

<新座>

全体を通して、利用回数は非常に少なかったと言える。日本語相談室は日本語の相談・指導を行う場ではあるが、雑談として人間関係や生活の悩みなどを話す学生もいた。こちらも話を聞くことはできるが、日本語指導以外の部分にどこまで踏み込んでいいのか迷うケースもあった。

4. 2012年度 立教大学漢字検定試験実施報告

	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格	
			特別外国人 学生		特別外国人 学生		特別外国人 学生	
第1回	5月16日 (水)	4月18日 (水)	特別外国人 学生	19名	特別外国人 学生	15名	特別外国人 学生	11名
			上級	7	上級	6	上級	6
			中級	11	中級	8	中級	5
			初級	1	初級	1	初級	0
			正規学部 留学生	3名	正規学部 留学生	3名	正規学部 留学生	1名
			上級	2	上級	2	上級	1
			中級	1	中級	1	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院 留学生	0名	正規大学院 留学生	0名	正規大学院 留学生	0名
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
第1回申込 合計	22名	第1回受験 合計	18名	第1回合格 合計	12名			
第2回	7月4日(水)	6月6日(水)	特別外国人 学生	22名	特別外国人 学生	18名	特別外国人 学生	11名
			上級	8	上級	8	上級	7
			中級	12	中級	8	中級	3
			初級	2	初級	2	初級	1
			正規学部 留学生	1名	正規学部 留学生	0名	正規学部 留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	1	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院 留学生	0名	正規大学院 留学生	0名	正規大学院 留学生	0名
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
第2回申込 合計	23名	第2回受験 合計	18名	第2回合格 合計	11名			

第3回	11月7日 (水)	10月10日 (水)	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	14名	特別外国人学生	12名
			上級	18	上級	12	上級	11
			中級	2	中級	0	中級	0
			初級	2	初級	2	初級	1
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			その他	1名	その他	0名	その他	0名
			第3回申込合計	23名	第3回受験合計	14名	第3回合格合計	12名
第4回	1月9日(水)	12月5日 (水)	特別外国人学生	23名	特別外国人学生	11名	特別外国人学生	9名
			上級	14	上級	7	上級	7
			中級	5	中級	3	中級	2
			初級	4	初級	1	初級	0
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			その他	0名	その他	0名	その他	0名
			第4回申込合計	23名	第4回受験合計	11名	第4回合格合計	9名

2012年度は、計画に沿って4回実施した。申込者数は合計で91名にのぼり、昨年度の申込者数の3倍以上となったことから、本漢字検定が留学生に広く認知されつつあることがわかる。漢字検定試験に申し込んで、希望すれば、本学独自の自主学習教材が受け取れるということが一つの魅力となっていることが考えられる。申込者数の内訳は、ほとんどが特外学生であるという傾向は変わらないものの、正規学部留学生からの申し込みも1件あった。

申込者数が増える一方で、当日の欠席者数が増え、実際の受験者数が少ないという課題が出てきた。具体的には、第1回から回を追うごとに申込者数に対する実際の受験者数の割合が小さくなるという傾向が見られた。

来年度以降は、本学の漢字学習支援の一つとして、さらに漢字検定を広く周知することにとめるとともに、申込者をいかに受験までつなげていくかについても工夫していきたい。

5. 2012 年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1 回 3 冊、2 週間までの図書の貸し出しを行っている。以下は、今年度の貸し出し記録である。

教材貸し出しの利用者数は、昨年度と比べると特外生は 3 倍弱、正規留学生は 4 倍強と増えており、日本語教育センターの自主学習図書貸し出しサービスが学生に認知されつつあることがわかる。

貸し出し教材の内容は、例年通り、特別外国人学生は日本語能力試験対策が多いが、漢字や文型学習のための教材の貸し出しもあった。正規留学生についても、日本語能力試験対策教材の貸し出しがあった。また、日本語ライティングのための教材や、日本語の使い分け辞典などの利用がある。

今後も日本語能力試験対策教材を充実させつつ、漢字、文型、日本語表現の使い分けなどの自主学習教材を充実させていきたい。

利用者数が増えている点を肯定的に評価したいが、その一方で、本学の留学生数全体で見ると貸出件数がそれほど多くないとも言える。来年度以降も、ホームページやニュースレター、また教員からの紹介など機会をとらえて、本サービスについての広報を積極的に行い、利用を促す努力をしたい。

【所属別記録】

	利用者数	貸出冊数
特別外国人学生	19	61
正規留学生	9	38
招聘研究員	1	6

【貸し出し図書一覧】

	貸出書名	貸出回数
特別外国人学生	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 文法	3
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 語彙	5
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 漢字	4
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法	5
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 語彙	4
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 漢字	3
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 文法	2
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 語彙	1

	新試験対応 日本語能力試験 N1 予想問題集 CD 付き	9
	新試験対応 日本語能力試験 N2 予想問題集	1
	新試験対応 合格できる日本語能力試験 N1 (CD2 枚付き)	1
	日本語能力試験 1・2 級レベル語彙完全マスター	2
	日本語能力試験文法問題対策 完全マスター 1 級	1
	日本語能力試験文法問題対策 完全マスター 2 級	1
	日本語能力試験対策項目整理 3 級問題集	1
	新・日本語能力試験 N1N2N3 新傾向開設と完全予想模試	1
	新しい「日本語能力試験」ガイドブック概要版と問題例集	2
	カタカナ語彙完全マスター日本語能力試験 1・2 級レベル	1
	実力アップ! 日本語能力試験 N3 文のルール (文字・語彙・文の文法)	1
	平成 17 年度日本語能力試験 1・2 級 試験問題と正解	1
	合格できる日本語能力試験 N4・N5 (CD2 枚付き)	1
	留学生のための時代を読み解く上級日本語	1
	例文で学ぶ漢字と言葉	1
	絵でわかるぎおんごぎたいご	2
	絵でわかる日本語使い分け辞典	1
	Intermediate Kanji Book Vol. 1	1
	Intermediate Kanji Book Vol. 2	1
	どんなとき どう使う 日本語表現文型 200 初・中級	2
	みんなの日本語 I 初級 I 翻訳・文法解説英語版	1
	みんなの日本語 初級 I 本冊	1
正規留学生	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 文法	4
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 語彙	1
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 漢字	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 語彙	5
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 漢字	2
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 語彙	7
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 漢字	1
	日本語能力試験文法問題対策 完全マスター 1 級	1
	新しい「日本語能力試験」ガイドブック 概要版と問題例集 N1, N2, N3	1
	日本語能力試験 (1 級)	1
	実力アップ! 日本語能力試験 N5 読む (文字・語彙・文法)	1

	大学で学ぶための日本語ライティング 短文からレポート作成まで	4
	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 Vol. 2	1
	絵でわかる日本語使い分け辞典	4
	語彙力ぐんぐん 1日10分 中上級レベル日本語教材	1
招聘研究員	4コママンガでおぼえる日本語いろいろ	1
	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 Vol. 1	1
	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 Vol. 2	1
	新しい「日本語能力試験」ガイドブック 概要版と問題例集 N4, N5	1
	実力アップ! 日本語能力試験 N5 読む (文字・語彙・文法)	1
	合格できる日本語能力試験 N4, N5 (CD2 枚付き)	1

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

今年度からの事業として、『立教大学留学絵師による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』を開催した。

実施要領、およびプログラムは以下のとおりで、当日は20名の留学生が登壇し、スピーチコンテストの成果物として、『第1回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー スピーチ文集』を刊行したほか、大学の広報媒体でも広く成果を報告した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

2012年12月4日に、日本語教育センター主催で初めてのシンポジウム「日本語教育センターシンポジウム2012」開催した。今回のシンポジウムのテーマは、「大学における日本語教育の意義と可能性」で、センターが設置されてから1年半が過ぎたところで、これからの日本語教育センターの方向を共有する機会とした。

当日は65名の来場者があり、当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える』として刊行した。

8. センター員活動報告

池田伸子

研究論文

1. 「スロヴェニア共和国における読み書き障害支援政策の沿革—ディスレクシアの学習者を対象とした日本語教育支援の基礎として—」『ことば・文化・コミュニケーション』第5号、立教大学異文化コミュニケーション学部、2013年、141-152頁（共著）
2. 「ブレンデッド・ラーニングを導入した日本語授業—メディアセンターの支援によるシステム構築事例—」『2011年度メディアセンター年報』、立教大学メディアセンター、2012年、37-40頁

講演

1. 「これってハラスメント？ただ指導しただけなのに」、2012年4月20日、芝浦工業大学
2. 「ちゃんと大学生してますか」2012年5月9日、立教女学院大学

研究助成

1. 2012.4～現在 科学研究費助成金（挑戦的萌芽）「ディスレクシア学習者に対する教授法開発—教員養成における指針の策定と手引書の試作」（研究代表者）（課題番号：24652105）

丸山千歌

研究論文

1. 「新しい日本語教材開発のための中日協働プロジェクト—「Can-do Statements」を用いた教材開発—」（徐敏民との共同執筆）『21世紀の世界日本語教育・日本語研究—中日両国国交正常化40周年記念論文集』高等教育出版社、2012年（印刷中）
2. 「日本語教育研究におけるPAC分析を活用した研究の展開」（小澤伊久美との共同執筆）『21世紀の世界日本語教育・日本語研究—中日両国国交正常化40周年記念論文集』高等教育出版社、2012年（印刷中）

報告

1. 「コミュニケーション重視の読解教育—読む・話す活動の統合とその効果—」（金庭久美子との共同執筆）
web版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』
http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2012forum/2012_P5_kaneniwa.pdf

研究発表

1. 「コミュニケーション重視の読解教育ー読む・話す活動の統合とその効果ー」(金庭久美子との共同発表)
2012年度日本語教育学会 実践研究フォーラム、於早稲田大学、2012年7月28日.
2. 「日本語学習者のアイデンティティは読解教材から連想するイメージにいかに関与したかーPAC分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究からー」(小澤伊久美との共同ポスター発表)日本語教育国際研究大会、
於名古屋大学、2012年8月18日
3. 「日中協働プロジェクト『新界標日本語』の開発および試行(徐敏民・喬穎・彭瑾・
小川誉子美・四方田千恵・奥野由紀子とのパネルセッション)日本語教育国際研究大会、於名古屋大
学、2012年8月19日
4. 「東アジアの教育ーその歴史と現在」(恒吉僚子・牧野篤とのパネルディスカッション)日本教育学会第71
回大会、於名古屋大学、2012年8月25日
5. 「留学プログラムの設計の違いが日本語学習者の読解教材への反応にいかに関与するか」(小澤伊久美
との共同発表)PAC分析学会第6回大会、於金沢工業大学、2012年12月8日

研究助成

1. 2011.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「留学経験から発想する日本語授業の新たな意
義ーPAC分析を活用した縦断的研究ー」(研究代表者)(課題番号:23520617)

小松満帆

研究論文

1. 「異性語使用における女性の意識と評価ー形容詞の母音融合形に関する意識調査ー」『立教大学ラン
ゲージセンター紀要』第29号、立教大学ランゲージセンター、2013年、21-32頁

高橋雅子

研究論文

1. 「日本語中級読解クラスの学習者の語彙に対する意識ー学習者の作成した語彙リストと短文からー」
『立教大学ランゲージセンター紀要』第29号、立教大学ランゲージセンター、2013年、51-60頁

研究発表

1. 「持続可能な「教師協働研究」を目指してー教師協働研究の理論的枠組みの試案と協働研究事例ー」
(門脇薫(摂南大学)・松尾憲暁(名古屋大学)・中山英治(いわき明星大学)との共同発表)タイ国日
本語教育研究会第25回年次セミナー、於国際交流基金バンコク日本文化センター、2013年3月16日

研究助成

1. 2012.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「海外における日本語非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する基礎研究」（研究分担者）（課題番号：24520593）

高村めぐみ

研究論文

1. 「日本語学習者のインタビューでの発話におけるポーズとフィラーの特徴」『比較文化研究』第102号、日本比較文化学会、2012年、101-112頁
2. 「韓国人学習者のイントネーションの特徴—スピーチを資料とした事例研究—」『立教大学ランゲージセンター紀要』第29号、立教大学ランゲージセンター、2013年、33-42頁

研究発表

1. 「日本語学習者のプレゼンテーション、インタビューにおけるポーズの特徴」カナダ日本語教育振興会2012年次大会、於カナダ・バンフパークロッジ、2012年8月2日
2. 「初級日本語学習者へのスピーチ指導—ポーズを視点に—」日本語教育国際研究大会、於名古屋大学、2012年8月19日

平山紫帆

報告

1. 「教室での学習内容と実践をつなげる活動案 —サバイバル日本語コースでの試み—」『立教大学ランゲージセンター紀要』第29号、立教大学ランゲージセンター、2013年、43-50頁

9. 2012年度 F D記録

(1) 担当者連絡会等

2012年4月5日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) M301教室

- ① プレイスメントテスト実施手順 ② プレイスメントテスト実施要領

2012年4月9日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 12号館第4会議室

- ② プレイスメントテスト実施報告 ③ 留学生スピーチコンテスト
③ パンフレット、ホームページ、CALLの開発 ④ 2013年度方針

2012年5月7日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 12号館第4会議室

- ① 教育講師のメールボックス ② 日本語科目受講状況 ③ スキャネットシステム導入
④ 日本語科目アンケート ⑤ 2013年度カリキュラム ⑥ 2013年度教学条件

2012年6月18日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 12号館第4会議室

- ① 2012年度日本語相談状況 ② 立教大学漢字検定試験申込状況 ③ スピーチコンテスト
⑤ 海外向けセンターパンフレット ⑥ 個人情報保護 ⑦ プレイスメントテスト改訂

2012年7月16日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 太刀川第2会議室

- ① 漢字検定実施状況 ② 後期臨時増コマ担当者 ③ 2013年度科目担当者、日本語相談室体制
④ 12年度科目担当者、日本語相談室体制 ⑤ 後期プレイスメントテスト ⑥ MIB科目

2012年8月21日、22日 (日本語担当専任、教育講師) マキム第1会議室

- ① プレイスメントテスト改訂検討

2012年8月30日 (日本語担当専任、教育講師) マキム第1会議室

- ① プレイスメントテスト改訂検討

2012年9月20日 (日本語担当専任、教育講師、兼任講師等) 12号館第2会議室

- ① 個人情報保護講習会 ② 担当者打ち合わせ会議

2012年9月24日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 太刀川第2会議室

- ① 後期プレイスメントテスト 報告 ② センターシンポジウム開催計画
④ 2012年度活動報告 ⑤ 2013年度新規事業予算、経常予算

2012年10月29日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 12号館第4会議室

- ① 2014年度以降のシラバス方針 ② 2013年度予算申請 ③ 2013年度日本語教育学会会場校
④ 研究のためのデータの収集 ⑤ 新座日本語教育センターへの日本語資料の設置
⑥ 日本語相談室非利用者アンケート

2012年12月3日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 12号館第4会議室

- ① 漢字検定 ② MIB科目 ③ 超短期プログラム調査 ④ 日本語相談室利用状況

⑤ データ収集の内規 ⑥ プレイメントテスト実施日程 ⑦ 2013 年度特別予算

⑦ センターロゴ ⑨ 図書資料管理方法の変更 ⑩ 後期授業アンケート

2013 年 1 月 28 日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 太刀川第 2 会議室

- ① ゲストスピーカー実施報告 ② 授業評価アンケート実施 ③ シンポジウム報告書
④ 日本語相談室アンケート ⑤ 2012 年度活動報告 ⑥ パンフレットおよびホームページ
⑥ 全カリ免除試験依頼 ⑧ プレイメントテスト日程 ⑨ オリエンテーション日程
⑩ 超短期プログラム調査 ⑪ 教育研究のためのデータ収集内規

2013 年 2 月 18 日 (日本語担当専任、教育講師、事務局) 1 2 号館第 4 会議室

- ① 12 年度春学期プレイメントテスト分担確認 ② 12 年度カリキュラム 担当者確認
② 12 年度日本語相談室体制確認 ④ ランゲージセンター移転後の体制について

2013 年 3 月 6 日 (日本語担当専任、教育講師、兼任講師等) 1 2 号館第 2, 3, 4 会議室

10 時～12 時 学部担当者打ち合わせ会議

12 時～13 時 体会議

14 時～17 時 J 0～J 8、日本語中級担当者打ち合わせ会議

2013 年 3 月 13 日 (日本語担当専任、教育講師) マキム第 2 会議室

- ① プレイメントテスト検討

(2) 日本語相談室アンケート (日本語相談室利用者対象)

日本語教育センターで展開している日本語相談室は、本学で学ぶ留学生の日本語学習支援を目的として、教育講師がそれぞれ 3 コマずつ担当しており、留学生にとって利用しやすい体制を模索するために日本語相談室初回利用者を対象にアンケート調査を行ってきた。今回は 14 名から回答を得た。以下にアンケート項目ごとに結果を記す。

項目 1. 日本語相談室は留学生にとって必要だ。

必要 14 名、必要でない 0 名

項目 2. 相談時間 (45 分) は適切でしたか。

適切 8 名、適切ではない 4 名 ⇒どのぐらいが適切か 「1 時間ぐらい」 3 名、「もっと長く」 1 名

項目 3. 日本語相談室で相談したことは役に立ちましたか。

役に立った 14 名

日本語のチェックがしてもらえた 12 名

日本語の知識が増えた 7 名

疑問が解決された 10 名

論文の書き方も学べる 1 名

日本語のクラスの質問もできる 1 名

悩みが解消した 1 名

役に立たなかった 0 名

項目 4. 開室している曜日や時間帯は適切ですか。

適切 11 名

適切ではない 3 名

毎日開室されるといい 1 名

週 3 回開室されるといい 1 名

不明 1 名

項目 5. テレプレゼンスを知っていますか。

知っている 0 名

知らない 14名

⇒使ってみたいと思いますか。 はい 8名

いいえ 6名 「池袋の学生なので」「対面で話せばいい」「話がずれやすい」
「必要ない」、不明 2名

項目 6. 日本語相談室に対しての要望、意見

- ・日本語のチェックをしてもらって日本語の使い方があらためてわかりました。
- ・だいたい満足しましたが、日本語相談室のクラスが通常のクラスと重なる場合が多いので、1回くらいは遅い時間も可能なら開室してほしい。
- ・相談時間が少し短いと感じました。
- ・週3回以上、1回60分はほしいです。
- ・論文の資料の調べ方を教えてほしいです。
- ・いい本をすすめてほしいです。
- ・役立つ意見をいただきました。ありがとうございます。
- ・先生が非常に親切にしてくださいました。本当にありがとうございます。日本語または日本語以外の知識を得、勉強になりました。1日に2回申し込みたいと思いますが。
- ・先生たちから日本語についての問題を説明していただき、しかも親切に対応していただき感謝しています。

回答数が14と多くないため、昨年度にひきつづき、データの蓄積が必要ではあるが、日本語相談室へのニーズ、および日本語相談室の有効性については全員が肯定的な回答をしている。一方で、相談時間や開室曜日・時間帯については、現行の45分体制よりも長く相談時間をとってほしい、もう少し予約の選択肢がほしいという声もあることがわかる。テレプレゼンスについては、昨年度同様に認知度が大変低い。周知体制について工夫する必要がある。

(3) 日本語相談室利用に関するアンケート（全留学生対象）

上の日本語相談室アンケートは、日本語相談室に来室した留学生を対象とするため、利用者のニーズはある程度くみ取れるが、そもそもの日本語相談室の開室の背景となった日本語クラスを受講しない留学生を広く対象としてニーズを調べるには課題が残っていた。

そこで、今年度の事業の一つとして、本学のすべての留学生を対象とした日本語相談室利用に関するアンケートを実施した。このアンケートはwebによるアンケートで、2012年12月10日から12月25日までの約2週間で行った。回答者数は54名で、結果は以下の通りであった。

項目 1. 所属 (1)

正規留学生 25名、特別外国人学生 29名

項目 2. 所属 (2) 学年

学部1年次 11名、2年次 3名、3年次 6名、4年次 9名

大学院前期課程1年次 10名、2年次 12名、

大学院後期課程1年次 0名、2年次 1名、3年次 1名

項目 3. 所属 (3) 大学院生 (25名) の所属

文学研究科 11名、社会学研究科 4名、観光学研究科 4名、異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻 3名、異文化コミュニケーション研究科言語科学専攻 2名、ビジネスデザイン研究科 2名、経済学研究科 1名、現代心理学研究科 1名 (大学院合計 25名)

経営学部 7名、観光学部 7名、文学部 5名、社会学部 5名、異文化コミュニケーション学部 3名、

経済学部 1名、理学部 1名、コミュニティ福祉学部 1名 (学部合計 24名)

無回答 5名

項目 4. 立教大学で日本語の授業を受けたことがありますか。

はい 38名、いいえ 16名

項目 5. (項目4で「はい」と答えた人は) 何によって知りましたか。

オリエンテーション 25名、国際センター内掲示 18名、授業 14名、先生から 10名、チラシ 6名

ホームページ 2名

項目 6. 日本語相談室を利用したことがありますか。

はい 15名、いいえ 35名

項目 7. (日本語相談室があることを知っていて、利用したことがない人は) その理由を教えてください。
時間帯が合わない 10名、日本人の友人・先輩などにチェックしてもらっているので必要ない 9名
申し込み方法がわからない 7名、日本語のチェックが必要だと思わない 5名、
手続きがめんどうくさい 3名、その他 5名

項目 8. 日本語教育センターへの要望

- ・ Really good service!! Thanks for helping me with my ronbun!! If opening hours could be extended, that would be good.
- ・ ボランティアで我々の留学生生活を言語面でサポートしていただきまして、本当に感謝しております。自分はまだ利用したことがありませんから、要望なりアドバイスなりは、ちょっといいにくい立場です。次学期申し込むことをも考えており、よろしくをお願いします。
- ・ メールで日本語相談室を利用できればもっといいと思います。
- ・ 特にないですが、ただ感謝の気持ちを伝えたいと思います。どうもありがとうございます。これからもよろしく願います。
- ・ 相談室というと、良いと思います! :)
- ・ 利用したことがありませんので、何度も言えませんが、就活中の学生にとってビジネス日本語は大事だと思います。その相談ができれば利用率も上がるのではないかと。
- ・ 相談できる時間が短いため、もうちょっと柔軟な対応が必要だと思う。
- ・ 日本語相談室は外国人にとって、すごく助けてくれたと思いますが、一週間前に要約する必要があるのは、ちょっと不便だと思います。もし2日前に予約する方がいいだろうかと思います。
- ・ いつもお世話になり、ありがとうございます。みなさまのおかげで、とって勉強になりました、ですが、できればインターネットの予約システムがあれば、一番有難いですね。現段階は生徒さんも少ないし、先生も少ないので、ちょっともったいないかもしれませんが、また、よろしく願います。
- ・ 申し込みやすくなれば、ありがたいと思う。

今回のアンケート結果は、日本語授業の受講者よりも日本語相談室利用者のほうが少ないという実態を反映させる内容となった。今回の回答者のうち日本語相談室の利用者の多くにとって、オリエンテーションや授業内での教師による案内、国際センター内の掲示などが日本語相談室の存在を知るきっかけとなっており、ホームページやツイッターよりも前者の周知方法が有効であることを示唆している。また、日本語相談室を利用しない理由は、必要性を感じないという内容のものと、開室時間帯に幅がない、または申し込み方法やその他の手続きが面倒だからという利便性に関する内容のものがあつた。開室時間帯や申し込み方法などについては、様子を見ながら工夫を加えていきたい。

(4) プレイスメントテスト実施体制の改善 (スキャネットシステム導入)

これまで手採点で行っていたプレイスメントテストの実施体制を見直し、採点の効率化と将来のテスト結果分析に向けたデータ集積を目的として、スキャネットシステムを導入した。これに伴い、夏季休暇期間を活用し、専任教員と教育講師とでプレイスメントテストの改訂作業を行い、2012年度後期から新規受け入れ学生対象のプレイスメントテストは新体制で実施した。

スキャネットシステムは、プレイスメントテストに加え、センター独自の授業評価・コース評価アンケートにも活用した。

(5) データ収集の内規

日本語教育という分野が教育実践と研究が密接に連関することが多い現実を鑑み、2012年度は前述(1)でふれた本学の個人情報保護の方針を徹底するための講習会の開催に加えて、データ収集のための内規について定めた。2013年度から事実上の運用を予定である。

2012 年度 日本語教育センター運営体制

運営委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：橋本 俊哉	(観光学部教授)
運営委員	：青木 康	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、文学部教授)
運営委員	：松田 宏一郎	(国際センターから、法学部教授)
運営委員	：松井 泰則	(部長会メンバーから、経営学部教授)

実務委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：橋本 俊哉	(観光学部教授)
センター員	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：田中 望	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：高村 めぐみ	(教育講師)
センター員	：小松 満帆	(教育講師)
センター員	：平山 紫帆	(教育講師)
センター員	：高橋 雅子	(教育講師)
事務局	：森上 美子	
事務局	：関川 瑞枝	

兼任講師

穴澤 孝子	谷 啓子
長田 紀子	長島 明子
川端 芳子	保坂 明香
栗田 奈美	藤田 恵
小島 佳子	御子神佳奈
小森 由香	山内 薫
清水 澤子	山辺真理子

2012 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	9	第 1 回実務委員会打合せ
	18	第 1 回運営委員会
5	7	第 2 回実務委員会打合せ
	11	第 1 回実務委員会
	16	第 2 回運営委員会
6	18	第 3 回実務委員会打合せ
	22	第 2 回実務委員会
	27	第 3 回運営委員会
7	11	臨時運営委員会
	16	第 4 回実務委員会打合せ
	20	第 3 回実務委員会
	25	第 4 回運営委員会
9	24	第 5 回実務委員会打合せ
	28	第 4 回実務委員会
10	3	第 5 回運営委員会
	29	第 6 回実務委員会打合せ
11	9	第 5 回実務委員会
	14	第 6 回運営委員会
12	3	第 7 回実務委員会打合せ
	7	第 6 回実務委員会
	12	第 7 回運営委員会
1	28	第 7 回実務委員会打合せ
2	1	第 7 回実務委員会
	18	第 8 回実務委員会打合せ
	22	第 8 回実務委員会
	27	第 8 回運営委員会

【参加者】

実務委員会打ち合わせ：センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師）、事務局

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・

副センター長からの選出委員、部長会メンバーからの選出委員、日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2012 年度活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2012)

2013 年 3 月発行

編集兼発行者 日本語教育センター
発行責任者 丸山千歌
発行所 立教大学日本語教育センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel: 03-3985-4202